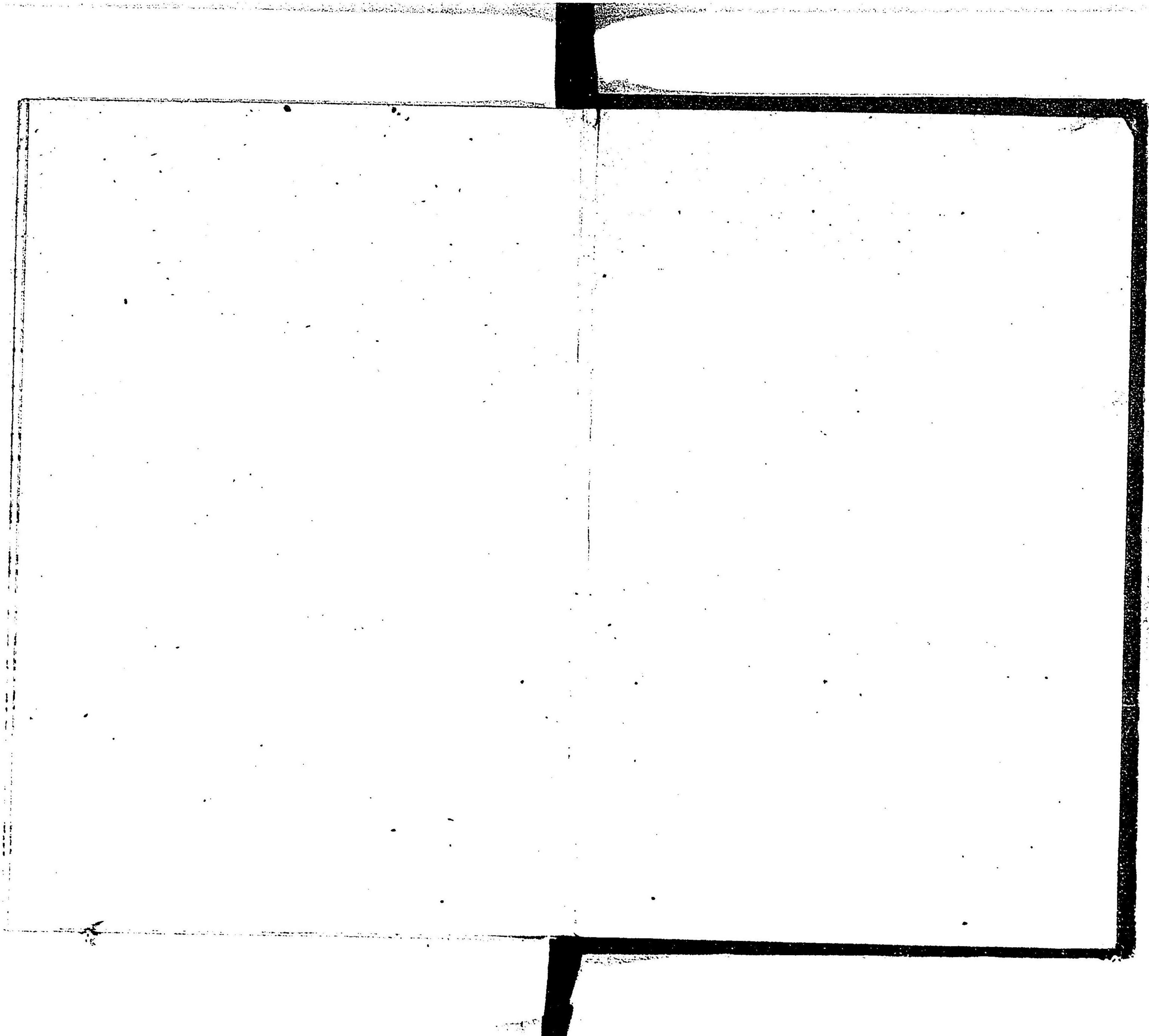




金鱗堂藏版

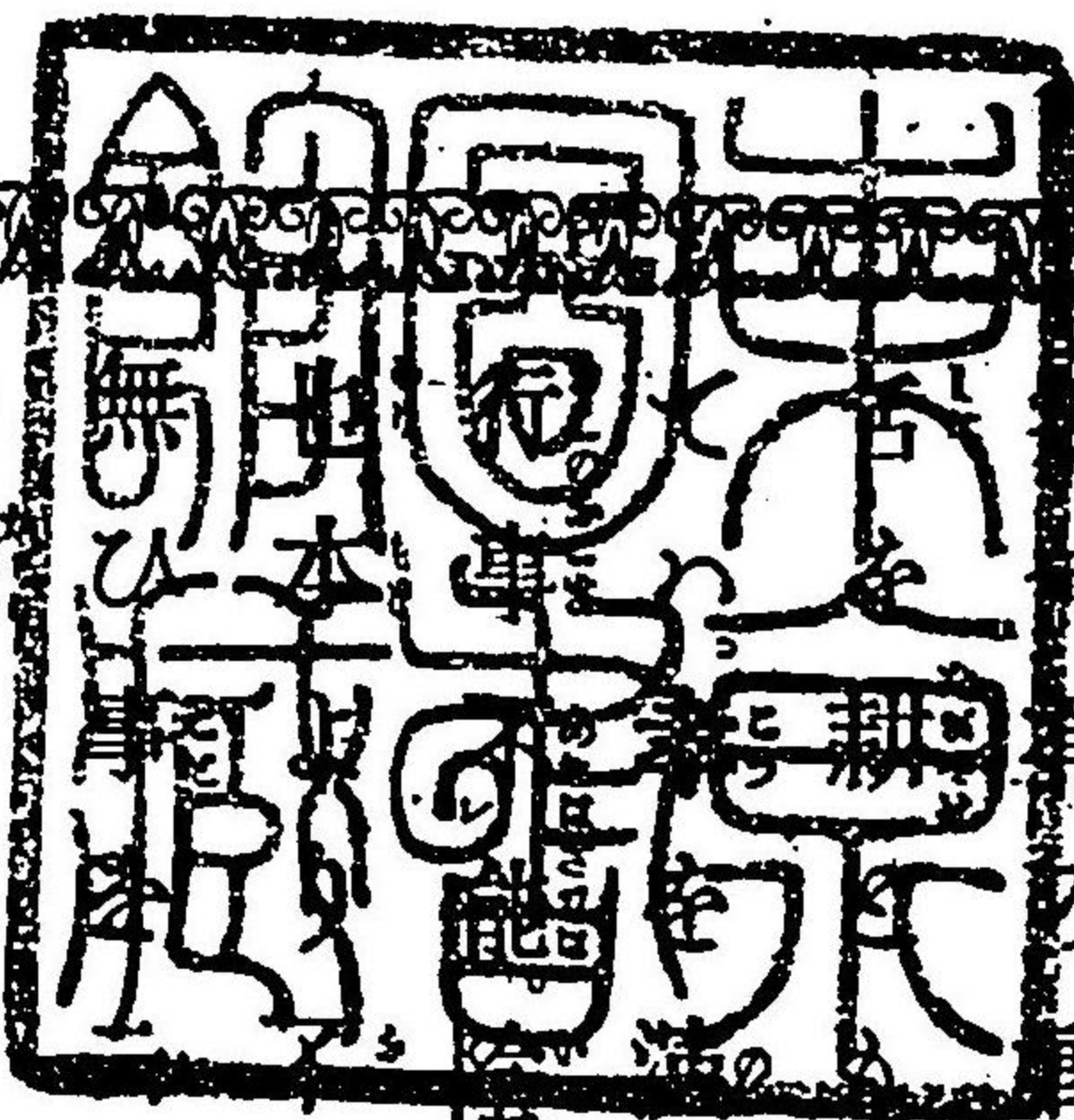






明治二十年三月三十日内務省交付 3351

特川 487



小説學賣卜先生糠俵序

無可有の耶  
き緘ぬ

に翁あり賣卜先生といふ終日  
軀に培ふにもわらず子に對し  
へ臣に遇ふてハ忠を説ども自  
陽師身の遇上知らずといふ宜  
學者論に不負口ある儘に實も  
ひ散らせバ糠俵と題して其口

安永六年丁酉五月

虛白齋







賣卜先生糠俵後篇序

翁また何をかいふや。辨をもつて智を飾らんとするか。きのふの糠俵を非なりとしてけふの糠俵を是なりとするか。過を恥て非を作れるものなるか

答

けふの是もあすの非ならんきのふまで是とかもひにしとの非なれば

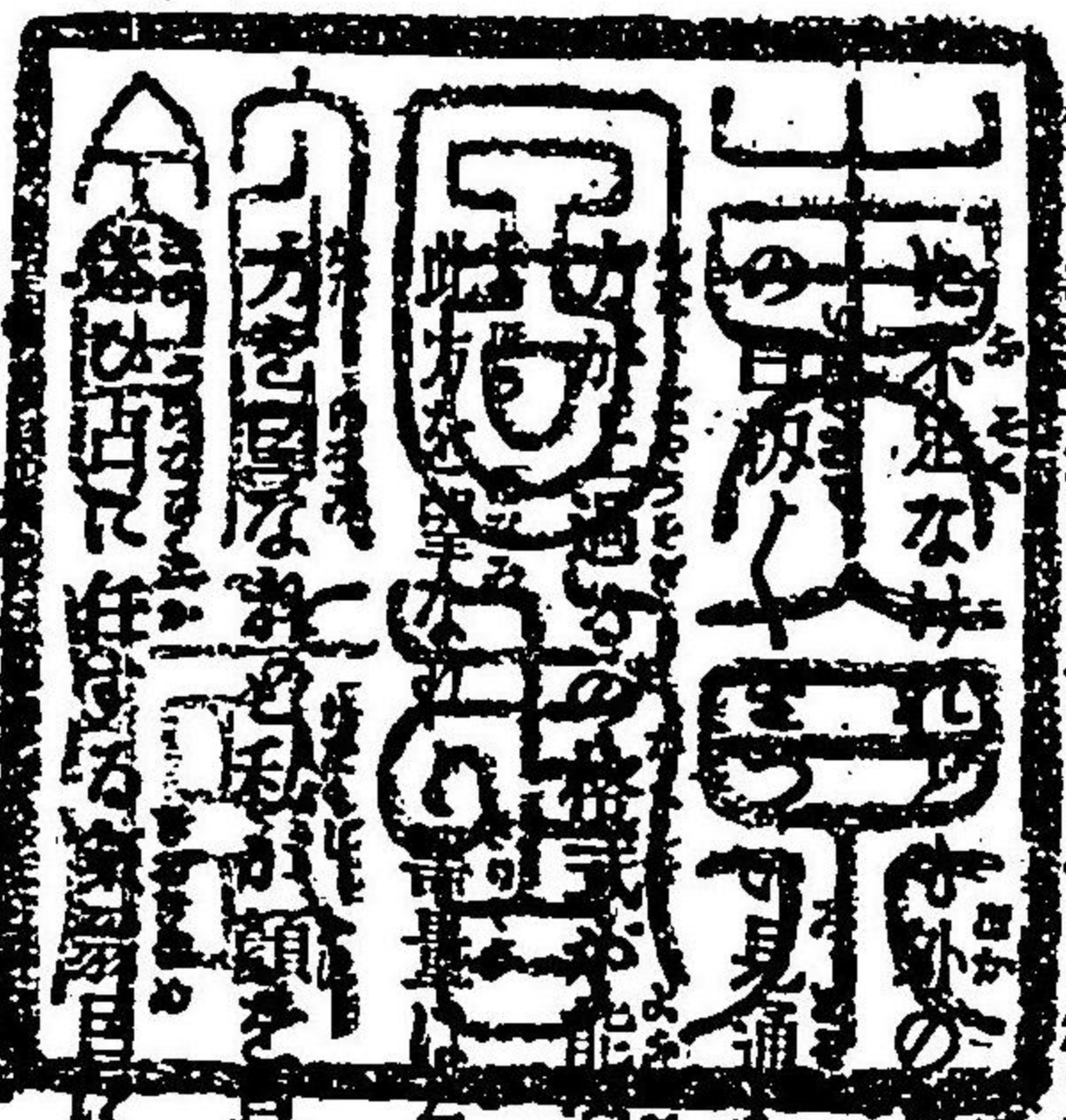
安永七年戊戌正月

虚白齋

賣卜先生糠俵

虚白齋著

賣卜先生席を改め一番の誰じや



私は縁組の事、付さし御占が頼たし翁算木を授て曰望人の二人望れ人のひとり一方は男也。不慮な事、少し言分又一方の外に言分なれども男振が少し劣る歎女也。見通しさや仰の通り一方の器量不足なれども親達は昔かた氣遣左程よおさうませぬ翁の曰親達の何といふふは親達の質素な力も置なれど私に頼を見て縁は道ばかりと押付られぬ其方の心次第と有故、私も心を占て任する事、角立て曰卜以決疑、不疑何卜同じ路二筋有て問人も無く不知とまひ卜て天に任す一筋道よ卜の入りぬ此縁組も塵算も人物歎縁の道ばかりの押付られぬなど、親達も親達育が惡ひ汝も嫁入せば子を持つて思ひ知れ親の子を思事假初ならん我あき後にも兎有ふか角はあるまいかと末の末まで案じ置親の安堵



する方は娘の不機嫌娘の好なは親の氣遣ひ其處へは心の付かず鼻の先の男撰と腹筋がよれるわい親の指圖の天のさしづ親を背くの天に背く何國にて身の立べきや殊更婦人の貴も賤も親に添ふ日の無數もの故に盡しても盡しても盡し足らぬは女の孝行嫁入しての夫よつかへ夫の親に孝行盡し老てり子よ従ふ身産の親に仕るの親十五年か廿年孝行は足りきとも親の望の方へ行氣を助るがせめての孝行涕もかんで涙も拭早く歸りて孝行盡せ

其次は誰じや

私渡世の小糠商賣まんまど口過のいたせしものは有りきつた身体にて大晦日のとりはらひ年中糠働をするも残念商賣替を致す積り是々の内何商賣の性に合ん御占給るべし賣卜翁の日向商賣も同じ事一升入徳利の一升入と遇ざるは時也律義一偏は仕馴た小糠よかるべし扱又爰は塞翁が馬といふ事がある信をどつて能聞れい其元の輕ひ渡世が薬よ成て達者で居るやら商賣替て心づかひ多くなり煩ひて死やら替た商賣が繁昌して俄金持よ成やら其金故に盗よ逢ひ丸裸に成やら往て見ねは知れぬ事じや西へ往たら

バ犬よ囓まいものを東へ往て犬よ囓れたと思へとも西へ往かなんだが何程の仕合やら内に居バ此足は蹴欠まいよといへと棚の物が落掛て天窓へ疵が付ふやら其流のおかひよて持病の頭痛が治るやら人間萬事塞翁が馬扱此人間萬事の内少しにても私が道入れバ塞翁が馬とは言さぬ可レ爲事をせず爲まじき事としての禍は已が有す所なり萬事に私を交へず慎と其上に來る福福吉凶苦樂ハ塞翁ののに任すへま

其次は誰じや

愚者が定命御占給るべし翁の曰長壽が望あらバ將死とき我の百歳まで生たと思へ百歳まで生たと思へバ百歳八十歳やと思へバ八十唯八十の百のと思ふばかりの事也七十にて死る人思違ひにて八十じやと思へ八十イヤ〜六十じやと思へバ六十皆思ふ迄の事也命の迹も無く先もあく今つかりのもの也我常に云ふ世界昔同年斯云へバとて生死は在天に此方の知つた事でも無いといふハ舌長其天命を縮るハ人也飲食枉席の不養生七情の用ひやうよて一生の内歳年縮るも知れぬ四十よて死る人天命ハ五十じやハら五十よて死る人五十五が天命やら醫書に曰我命在天我命不在二於天一



其次の誰じや

此間打續夢見凶し夢占給へるへし翁の曰夢見悪くハ一入慎と善事を行へ善事を行へ  
ハこれ即吉夢也縁は追付貧乏なく慎とに克福ひなしたとへ善き夢を見ても其夢を鼻よ  
掛け放し行へば福忽ち來るべし

又問翁の教めてハ凶夢も吉と變り悪女も美女も成るとの暗かハ不思議もあるや如何  
翁答て曰美目好き者其美目好を自美目好とすれハ其美目好を失ハ媿者其媿を自ら  
媿とすれハ其媿を消す顔容の美惡而已ハあらま諸道皆知此少しにても矜誇心あら  
ハ味増汁の味増臭く醬油汁の醬油くささの誹りをうけん京羽二重ハ肌目も細く色も白  
く媚よしなれは是も百目の絹を百二十目と高ふれハ能ハよいか直の高いが疵なりと手  
を指す人稀あらん河内羽二重ハ色も黒く肌目も荒て不器量なれと拾奴の毛綿を丸也  
と低出れば直ハ惚る人数多あらん客のいハく是ハ左もあるべし百目の物を百目拾奴の  
物を拾奴と云ハ如何是も亦云ひぶん有や翁曰此處出入なし去ながら今云ふ拾奴  
百目と見ても代物の皆手くた有て油断ならず色の黒ハ白粉よてちやかし生へ下りの

無ハ狐で黒め齒の欠たるハ蠟石を埋め髪を薄まハ染川を雇ふ櫛笄ハ猶更衣類また漆  
し三貫目位の身上ハ内儀の出立と見れば千兩も取女形の舞臺衣装又呉服屋仲間の黒人  
直打にもアノ衣装の結構共まじりの立派安お踏んでも先千貫目からの身上と評判する  
娘子の道行樂屋を覗ハ間口五間にハ足らぬげな  
其次の誰じや

拙者相應に暮せとも是ぞといふ樂しみなし何を樂しむにいたま樂んや御考給へし  
翁曰樂ハ苦の本苦は樂の本とかや樂みたいとれもふ苦もなく苦をせま下と思ふ苦な  
くんハ何れの世界ハ苦れあらん財寶田地なければやしき苦があり有れハ又失ハじとれ  
苦をする也時たいと思ふ苦なけれハ耗さじと思ふ苦もなし家屋備身の廻りいやがう  
へにはしき苦ありおれハ有ほど苦ハ多し親にうりの息子とれ主持の若衆など一夜二  
夜の樂しとが際ハの苦と成苦に苦を重れハ一生の苦となり自身の苦のみよめらす親  
兄弟の苦に成る主親を持し身は一入慎と樂たい苦を止よかハ百病ハ苦より生を樂と  
たい苦を止て天命を樂むべし又問私本より病身にハあらざれども唯力弱くて口惜し



強くなるは考へ有まじきや翁曰力の強きを強として其強を誇る者は人に勝事を快とす此故よ我より強者ありて争とさば吾必危うらん力柔を柔として其柔を安んずる者人に勝事を快とせず此故に我より柔者ありても不レ争不レ争危事なしされハ昔より其力を恃で其身を亡せし人和漢其強を知らず能騎者ハ落能遊者ハ溺るゝなり河を馬し虎を搏にするなどは是匹夫の勇力也實の勇ハ不レ然無理非道をもよけて通し堪忍のさらぬ處を堪忍し己に克己にかつおのれに克よあらずんば勇力といふべうらむ日夜朝暮地どりして己に克己にかつて天下よ敵なし是を不レ勝の勝といふ唯強き奴ハ人欲也此人欲と地どりするに中く十番に五番は勝てぬ閉口く

次ハ誰ヒヤ  
私十二歳より去方へ奉公に參り今年廿五歳少々銀子を遣ひ過し其銀を黒りんとさす々々もがき彼是の損重り親方の銀を余程おたり只今にては術尽き穴落と胸を居へし追人の掛らぬ方角御考下さるべし翁頭を振ていなく危し一泉罫を替るといふ卦じや昔し此泉東をさして飛びゆく鳩問て曰何國へか飛さり給ふ泉の曰此里の人々我聲の恐さ





を嫌ふ故よ飛去也鳩ぐうく笑て日飛行先の人くもまた汝が聲の悪を嫌ふべし汝が聲のあしきを直さば何ぞ飛さる事のあらん其元も此通り唐天竺へ飛去ても心の悪を直さでは行衛定ぬ雲助ちよばくもちよんがれよて一生をくち果ん主親に勘當受て天下の御帳面もれ人の内にてハ無きぞ今又本心に立歸り過を改めば欠落るるに及ぶまじ今本心に歸りても金と皆遣ひ果す迹偏也と言んが爰が彼の本心過 則 勿レ憚レ改 是迄の過ハ是非なし有へかへりに底を叩き幾重にも詫と願へ許容あらば其恩を胸に懐ちよばくれの事を不し忘心力を盡し私心なく奉公せよ扱銀子の代にハ給銀も仕着も辭し冥慮も叶ひて宿遣入せバ殘銀と償ふべし若また宥免なくして如何様の咎に逢おても本心さへ本心ならハ身の過を悔るバかり何をかうらみん

此とんバくでござります歳ハ十敷九つ敷すゆと寄て手を出したとて珍しい手の筋情出まて手習すれバくつと手の上る筋惜い事ハ手習が嫌ひさうな習ハねハ一生無筆で人ハ笑るハ筋もある扱此六月七月にハ氷に溺るといふ小筋が有川へゆく事ならぬぞとれ

右の手を出した此月は劔難の筋が見ゆる指を切るか手を突か小刀細工のならぬ月じや扱又爰に迷ひ子よなるといふ恐しい筋があるむかひ隣へ行よも親たちに問ひ行とわれハ行ゆくなど有れば行かれぬ断なまに行が最期人買に連れて去るハ畏手筋これお袋袋の事も言ふ敷次手ハ汚頼もまますとれ脈を見て遣ふ此月と頼もも知れぬ月じや身柱とすじかいすへねバならぬぞ又來月つれてござれ

其次と誰じや  
是ハ元より下京に住居とる好風と申按摩にてハ我母の親を持心一杯孝行を盡せ共ある夜不思議の夢も見せ今に釜も堀出さねハ昔しに髪らぬ貧乏暮し天道未だ淨存知あるか但しハ誰ぞと間違は致さぬ敷ハ考給ハるべし翁 笑を忍で曰ろれ孝は子たる者の可レ盡役はて盡す孝行何の不思議有てか福を期扱又不孝なる者は雷にも打たれ蛇も吞れん其れらのわざわいなきこそ親のたまものなり猶倦ます孝行それハ幸ひかさなるべし

次は誰じや  
私ハ失物よ付て汚占が頼たま一兩日以前金子五兩硯箱の引出しへ入れ折節客來よ取す



忘れ忘れ置しが今朝ふと思ひ出し引出を見るに其金なしもし覺違ひもやと思案の底と  
 叩紙屑籠でさがせども更に不見彼是思ひ廻らすに疑しき事ありて潜よ心を付て見  
 るよ其人の顔色の云さま立振舞に至るまで儘に此人の仕業と見へながら是とい  
 ふ證據もなし云ひ出して悪からんや善からんや御考給るべし翁の曰過て人を疑は  
 人と我と共に亡ぶ危しく昔し斧を失ふ人あり其隣の子を疑ひ其顔色聲起居動作を  
 見るよひとつとして盗にわらざるのなし日を経て外より彼斧を持来り永々借用辱  
 と返辨す斧主初て疑晴れ其の隣の子を見るに顔色聲起居動作微塵も盗臭い處なし  
 是等の是斧よ心を失ひし者あり汝も其失ひし金を尋んより先ろの失ひし本を尋見るへ  
 し唐土に二人羊を牧者あり其一人は書に見入て羊を失ひ又一人は博奕して羊を失ふ其  
 所作は異なれども羊を失ふに至て一つなり其羊を失ふはまづ本心を失へばなり書物  
 も書物の見やうによつて其本心を見失ふ況や博奕名聞利欲色欲におゐてをや可恐々々  
 其次の誰じや

鳥目一錢にて百病の藥ありと聞彦考如何翁の曰不斷保養灸すべし古書曰聖人不

治己病治未病不<sub>レ</sub>治己亂<sub>一</sub>治未<sub>レ</sub>亂病已成而後藥之亂已成  
 而後治之譬猶渴而穿井闢而鑄兵と己に病るを療る衣の垢を濯ふが如  
 し一濯くにて強く成か弱く成か

能書 第一孝よし 臣に忠によし 一と擧るよいとまをし

又問ひとつの夜具よ十人寢て寒からざる考ありと聞如何翁曰何程結構なる純子細珍  
 の夜具なりとも二人の知らず三人の寢られま是を毛綿の夜具にせば十人も十五人も  
 寢らるべま寒夜よ御衣を脱玉ひし天子もあり恐れながら一人毛綿を勘忍とれば十人寒

苦を渡ぐべし  
 其次の誰じや

私昨夜提物を落す落し處は考下さるべし翁曰昔しより裸で物ハ落さぬといふ常々  
 裸の事を思へこれ物と落さる呪なり往古より産衣着て生れたといふ人を聞かず禪か  
 ひて誕生したる沙汰もなま皆九裸で生れたる人なり其九裸で生れたる人の中よ九裸で  
 居る人ひひとりもなし此所會得せば何をか落すとし何をか失ふとせん其九裸で産れ其



丸裸で死る此身金銀財寶一物と我もの有んや  
 是皆世界の寶はると明かなり是を我者なり  
 と思ふ人ハ巳が榮耀榮花にハ金銀を借し  
 ます人ノ事よと吝さものなり淺ましからず  
 や昔楚の國の玉符ハ出て弓を失へり其近習  
 求んと請ふ王の曰止ハ楚人弓を失ひ楚人  
 弓を得ん又何ぞ此を求ん孔子聞曰惜乎其  
 不レ大也  
 楚也楚の字だけつけしやと此方の親玉ハ  
 手廻るを我物じやといつ頃よりか思ひ込  
 する此身我物が我物で無いか  
 其次の誰じや

句ひなきハ假の物ながら元ならぬ句ひにハ  
 心ときめく是ハ如何あるとやらん  
 考給ハるべし翁曰句ひばかり假のもの  
 にて紅白粉ハかりの物よあらずや紅白粉  
 ハかりの物にて髪かみの銚かざり衣紋えもんハ假の物  
 ならずや紅白粉も粧ます句ひも止めぬ丸裸  
 ハ假の物よあらずや或は琴あひこの爪音つまねの  
 氣けたかきを聞和歌わがの優あましく手跡てあとなど  
 の拙つたなからぬを見てハ猪口鼻いのくちばし  
 ろげも知らず心ときめぬたどハ目鼻口も  
 どのまほらしく姿聲すがたこゑ音ねの可愛らしきも

皆地水火風の奇細工唯今生て働きま  
 ず忍ち五輪ごりんと變りますれハ惣やうさ  
 まハのはいとま乞こい天てんから  
 其次の誰じや

此腰物は考給ハるべし我等ハ少し奢  
 なれども珍敷道具性しやうハ合ハり求たし翁  
 目めの輪りんをばつして曰自心に奢と思  
 ふ道具ハ則性すなはちに不あ合也奢ハ細微  
 を慎つつしむべし是程の事ハ儘まま  
 彼れぐらいの事はあざハ目放めはなへ  
 から蓋かぶハ一杯いっぱいほどの奢が未まに  
 至りてハ大船おほいせんを浮うべ  
 人或人能あひたりき鏢つばを一枚堀出ほりだし  
 刀屋かたなやを呼此鏢我等如ごときに  
 奢りなきとも此儘置このままも費也此  
 差さハ打替うちかたし扱さつ此鏢ハ此  
 線頭せんとう不相應ふあひあならバ吟味ぎんみ  
 して給ハるべしとまづ線頭せんとうを  
 奢りぬ傍かたわらよ人有て曰此線頭ハ此  
 鏢つばと不足あまならずや奢給あまへ  
 といふ亦また鏢つばも奢りぬ中なかよ  
 地心ちしんありさふに見へし目貫めぬ  
 鏢つばが替りてハ見るも堪へず又目貫  
 も奢る柄廻つらまり掛かへハ初はじめ  
 奢りなると思ひし鏢今にてハ不足  
 なら共是ともハまづ堪忍かんにんとべし  
 堪忍かんにんのならぬハ肝心かんじんの魂たま  
 と相應あひあの身みを吟味ぎんみして是も  
 奢り切羽せつぱはいき目迄打揃め是ハ  
 相應あひあの小柄こづかをと方々吟味かた  
 して是も奢りぬ扱腰物さくわうぶつに  
 鈎合印籠巾着こうがういんろうちやくを  
 奢り是をさか是を指さて此衣類この  
 ハ不似合ふにあと呉服屋沙汰ごふくや  
 此袴このはかまよハ



此羽織は不足此小袖に此帯の劣るなると是もまず相應に奢り着替て指てぶらさげても  
是迄の朋友一家の段違よて面白からせ様々よ吟味して風体相應の付合を修り此付合よ  
此座敷の下作な庭廻りが不風雅な家業の勝手をかまへせ家屋鋪と廣め造作の物好是  
より奢りに實が入て終にの身体を棒振虫浮沈みの世の習ひ歟

其次の誰じや

先生の 占立妙なる事兼て某承る金子の生る樹の作り様御考給るまじらや  
やにかまへて日人草木よ培事を知れども心よ培ふよとを知らせ心よ不培故貪欲よし  
て足る事を知らず足る事を知らざれば千箇の寶も無さが如し是を貧乏人とも云ひ又有  
財醜ともいふ足る事を知れ足る事を知るときは是を萬福長者なり何を  
有とし何をか無とせん或人の語りに我庭前よ梨の樹あり初て實を結ぶ事九ツ其年の二  
ツ不足其翌年の三十生り此年の亦不足事十二三其翌年は五十生て廿不足梨の數益  
せば不足數彌々増し後くハ買ひ足して賦ぬ一昨年の大風に此梨の樹倒れて枯ぬ其  
後の梨もなし不足事の世話もなし鬼に瘡を取られしと笑ぬ

其次の誰じや

酒の醉本性忘れ昨日の跡を聞よ參つた酒の損益承らん翁の曰 酔よ一杯人酒を飲  
二杯酒酒を飲三杯酒人を呑人酒を飲ときは體を散支血を和らげ毒を消え邪氣を防ぎ夏  
の暑をいらひ冬の寒を凌ぐ是酒を飲人も春の花秋の月にと酒を飲人稀にして多の酒人  
をのひ子曰唯酒無量不レ及レ乱人に下戸あり上戸あり其數よ量なし唯乱よ不レ及を限  
りとす柔弱多慾の輩は皆酒よ吞れ外行ひを取内徳を亂る過是より大なるハなし又曰  
不レ爲三酒困一既よ困るにいたりてハ輕きものハ疾と成脾胃と損じ瘀血と醸す酒によつ  
て發る病一々擧るよいとまなし重き時ハ父母を忘れ命をも隕す或ハ邪をも亡ハ家をも  
敗り海山も呑田畑も飲み牛馬も呑と娘をも呑む此類又數を知らせ客肘を張て曰汝下戸  
の分際として何ぞ酒の意味を知らん汝は酒の過のみ知て酒の徳を知らざる也酒ハ愛の  
玉帶五六杯かたむくれハ愛でも屈詫でもさつハりと掃散し心よかゝる塵もなく泣顔忽  
ち笑顔となる是酒の一徳也素面のときハ心細く一人ハ一里の路も行けぬ飲ハ忽ち千人  
力山でも川でも恐れなく却て夜道ハ面白これ徳の二なり可談事有とさなと酒の力と



借らされば心も弱く口も重く下戸よさへ云ひ負る不思議や酒が乗移れば傍よ人なき心  
 地長者でも先輩をも理を非よ曲て云ひ伏る是徳の三也嗚呼酒ある哉翁の曰汝が所  
 謂徳ハ我所謂過也人の賢愚となく老少となく憂なき事不能父母疾よ臥給ふ歎又ハ  
 身まかり給ひても汝ハ酒を愛を拂ひ泣顔忽笑顔にする是過の第一也孟子の曰知レ命  
 者不立三岩牆之下一危を恐れざるハ命を知らざる者也却て夜道が而曰く山川の恐もる  
 く災を招く事は又過にあらざるや汝傍若無人に人と争ひ非を理に曲て云伏る酒の  
 徳ありといふ口ハこれ災の門酒は是災の根也汝ハいまだ醉が醒ぬまわく休め後に  
 逢ふ

客の曰酒の論ハまづ置口は災の門ならハ善導大師口より彌陀を吹出と事如何翁の曰く  
 唱れば佛も我もなかりけり南無阿彌陀佛く口からは佛を出さふと鬼を出さうと嘘を  
 出さふと實を出さうと福も出で福も出づ親しくなるも口疎くなるも口敗るも口成る  
 も口口ばかり斯めるに非ず盗みする手もあり欠落する足もあり不義の道具も所持した  
 る身なれば不慎あるべからず古語曰一言以興邦一言以亡邦

其次の誰トヤ

渡世に遅れ學文いたす餘力なく文盲なる私かゝる一文不知にても道にかなふ行ひあり  
 や御考下さるべし翁の曰孝行也論語曰君子務本本立道生孝弟也者其爲仁之本歟  
 たとへ一文不知なり共文盲に孝行盡さハ是を君子の人とも學びたる人とも言め文章を  
 工みよ書き詩を達者に作るばかりを學者といハ不言産業を欠き米錢を費し學文して何  
 の爲子万巻の書を聞記ても父兄に孝弟ならざる人の一文不知の孝子にハ劣らずや或人  
 語て曰我舊里に孝子あり名ハ細屋何某老母に仕て至れり盡せり我見る處を以て其二  
 を語らん夏の日は暑にハ屋上よ水を洒きて老を涼しめ冬の寒夜ハ裾よ臥て足を暖め家  
 業の外ハ一寸も内をいせず老母の傍に問慰む其下の町ハ頼寺あり法談ある毎にハ老母  
 を負て参詣し亦負て下向す年四十を過る迄妻を不娶孝の衰ん事を恐れてとなり老母  
 死て後初て娶今ハ男子二人を持てり或とき孝子外より歸り庭の滯たるを見て其妻にと  
 ふ妻小兒の尿なりと答ふ夫の曰く親の譲り給しよの屋敷我悴の小便よて如此汚す事  
 恐れあり勿体なしと己來を禁め其土を堀り他の土を入替ぬ衣類又如此親の身よ觸れ



給し物の恐ありとて子共の勿論自身も不若施物よなりぬらん或日我問て曰足下の  
 孝心一郷に亦類ひなし何れの師に學て如し此や孝子恥る色有て曰孝行は中々我等とき  
 の可及事に非ず身体髪膚皆父母の賜なり其身体髪膚皆父母の爲に盡し終りてもいど  
 く也其より上の孝行を盡さされば孝行よてゝあるまじし流涕して又曰老母在す内よ  
 の我代りて仕る者なし故に産業の外に内を不出何の餘力ありて師に仕る事を得  
 ん今よ至てかたのとく不學文盲なりと語りぬと語りぬ是等の人の雖曰未學必  
 學たる人よ勝れりとや言はん  
 其次の難じや

近年の昔しと違ひ時節が廻ふて渡世まがたし何ぞ能身過有まじさや御考給はるべし  
 翁空うろ吹て海士のかる藻よ住虫の我からどねをころななめ世を恨じこれ御客時節  
 が悪ふて世が渡りにくひの身過々出来ぬかどの冥加知らずのいふ事なり泰平の御世に  
 生れ合何ひとつ不自由なき儘に飽まで食ひ暖よ衣身の分限をわきまへず奢り驕り重  
 る故身過の出来ぬ而已あらず人の身過の害をなすれくの分限を知り少も奢りがま

しからる己が家業を本とせバ今この御代の有難きなごの渡世のかたうらん鬼や角いふ  
 の昔分際を知らざる也亂世の悲みを知らざる故かゝる浮治世の安樂あるを安樂なりと  
 も思はせ其安樂あるを安樂ありとも思はざるの長くの大病本復して本復は祝ひそる  
 人はあれど病ざる祝ひを祝ふ人なきが如き歎又途中よて日を暮し闇の夜よ路を失ひ如  
 何共せんうたなき時思ひがけなく人有て挑燈を貸てくれなバ其時の嬉しさいつまで  
 も忘れず折節にの思ひも出し云ひも出して悦べども日々照を給ふ天道の事は小挑燈や  
 とよも思はず自身一分れ小挑燈の悦べとも廣大無邊の天恩國恩を左程よも悦ばざる  
 の冥加なき事に非ずやまかのみならず己が勝手の悪きとては降の照の長さの短の何の  
 角のと役よも立ぬ兼言をいふ去とての目を覺し賜へ  
 其次の難じや

拙者生得短氣よて腹立どまの迹なき見ず怒り罵り科なき諸道具を投得り杖棒を振上  
 たり拳よ息を吹かけたり燃立どまの火よ入るも知らざれ共るる短氣まつまれはる  
 の後悔亦甚し後悔も我短氣も我後悔する短氣ならバ發さぬが能といふ人あれはれ



が發度て發す短氣歎生質なれば是非なしとまた短氣發る是にも醫者れ有べきや御考  
 給はるべし翁の曰阿房よ貼る藥のなけれは汝の少し脈がある雖二下感一道心なき事不能  
 後悔さるゝあるべき去ながら短氣を生れ付るど、の付けふ藥も無ひ一言生質の短氣なら  
 バ今爰へ出して見せよ出まいがないや爰な内廣がりの外狭り短氣の本氣儘といふ病也  
 上へ向て短氣出まい人よよつて發り人によつて發らざる短氣を生れ付ありと捨置ハ  
 病に病重ぬべしもし隣の小兒を懷き膝へ尿クケられても汝又短氣の發る歎曰否相人無  
 我なる故短氣不出また問屋根板風に吹散て小髻先に疵付なり其れ如何屋根板に心な  
 き故我亦腹の立事なし然らバ何ぞ無我無心にはならざるや短氣者肘を張り額に青筋立  
 て曰翁のおしへ入はがなり其無我無心ハ人ハ腹を立てせまじきおしへならずや我問所  
 左よわらず腹の立ざる教を聞翁笑て曰まづ人ハ腹を立てさせざる修行せよ是短氣を  
 治す剽劑也もし無我無心の短氣無我無心の腹立ならバ何んばなりとも出次第く  
 其次ハ難之や  
 私ハ田舎者姑に憎まれて家出いたま尼にも成ふ歎いつる死んとも仕廻ふかと取つ置つ

先占て見て下さりませ翁算木を投て日輪の危を畏れて水に投る者とし甚惡ひ今死  
 では修羅道へまつ逆またとへ尼よなつたりとて世を恨ての尼なれば是もまた修羅の種  
 弟ハ若は能がまどが無い尼に成にも及はず死ねるにハ猶及バぬ其方の心ひとつよつ  
 い丸うある事じや是よよふ似た話しがある仙壽村の花車バ、とて近郷名うての姑有  
 り年の七十齒ハなぐれと嫁を囁事煎餅の如くあれバ鬼をいとも異名せりとうく三人  
 囁出して今の嫁ハ四人目は甚だ辛バう強い利發ある女あれども夜寝となくふすべ立  
 られ余りの苦き堪かねて今其元のいふ如く尼に成うか死う歎と心ひとつよ居かねて  
 隣の魚屋に是を話す此魚屋半兵衛ハ范蠡もどきの智者にてぐつと吞込み姑の心さへ  
 和がハ四の五のハ入まい其心を和る事某が方寸にあり其元の姑に限らぬ事年寄の意地  
 の惡ひハ生れ付では無いやまひじやと去る御いしやの御咄し此病を治す事疾でも行せ  
 針も届かぬ唯一色奇々妙々の藥喰が有とて傳授と受て覺て居る療治して見る心なら  
 ハ藥ハ已が調合して煎煮の加減も傳授せん一日二三度宛飯のとき用てよし我等醫者  
 よあらざれば藥代は現銀貸芋紡か糸を續か其方の手から拵て錢持て取にごされ扱又爰



に大事が有る此藥を用るうち病人は少にても腹立させる事ならぬ一寸でも氣が立て  
 は藥反て毒となる打たれうが擲が杖の下から機嫌を取淋しげに見ゆる時酒にて用  
 ゆるも又よしと用やうの秘事口傳云合て歸しぬ嫁の教も隨て朝は鳥の先にをら夜の  
 明る迄賃芋紡み盡も仕業のすき間に糸を續ぎ夜はひとり寝廻りて夜半八つまで賃仕  
 業糸を續き賃芋紡味を調へ二三度宛日毎こゝに用けり未だ二廻りにも盈たざるよ其  
 駈し手の裏を返す如く日比手強き兎者人我慢の角とこりりと落し嫁子を可愛かる而已  
 ならず忍辱柔和の佛となり今に佛はさまとて達者で居るげな是の魚屋の方便にて旨さ  
 さかあの料理して嫁の力みを抜き故あり此方に力む心なければ先にも力む心なしたと  
 へハ捨小舟が流れがより人の舟にあたりても此方が捨小舟なれば先の舟腹へ立ぬ先の  
 舟の怒らざるハ此方の舟に心無れば也船に心有るが最後互に怒り馬りて果てハ波風荒  
 くなり何處へ舟が着ふも知れぬ我よきに人の悪さハ無きものぞ先の心の和がさるハ此  
 方に力みの有故也力みを抜ても和がせんハ力みを抜ざる故と思ひ又力みを抜べし其上  
 にも和がさるハいまだ力みの抜ざる也又力みを抜べしまた其上よも和がせんハ力みの

抜やう足らぬと思ひ又々力みを抜べしいつまでもくささの心の和がさるまでハ此方の心  
 の力みを抜け笑顔ハ打れぬ物や  
 其次ハ誰じや

私の望める身何れの神何れの佛も立願掛て納受あらん修考下さるべし翁の曰心だも誠  
 の道にかなひなば祈らすとて神やまもらん神の守り通しあり祈れハ守る祈らせハま  
 もらじと神に隔る心ハなし人の心は神を隔る誠の道とは正路也其真直なる道を行かす  
 道ならぬ道を行き無量のくるまみ其身をせむるハ皆己がなす災なり何れの神に祈らん  
 や又神ハ正直の頭よやどると聞て唯正直なる頭を撰て宿るやうに思ふ人あり不レ然一  
 面の神國なれば神の宿り給ハざる處やある目に見耳に聞口に味を知る迄も神の宿り給  
 ふにあらせして誰但し人の力にて見たり聞たり味を知るとぞ其神を神と知らず誠  
 くだ神よするときは視れども不見聽ども不聞食へども其味を不レ知よ至る初又昔し  
 枇杷を嗜人有り其核の大なるを愁て清水に誦て枇杷の核をなからしめ給へど觀世音よ  
 祈誓す是を聞もの愚なりける人也と笑ふ枇杷の核の愚なる事を知つて笑ふ人も己が日



々の願ひ皆枇把の核なる事を知らず先今日の命も知らず翌の事を願ひ其身を慎まで災  
 の來らぬ様にと願養生いせざして無病を願願の處も耻す此戀うなへ給へなど、新  
 る類皆枇把の核ならずや朝毎に神棚に向ひつたふ顔をしかめ咽どかすり富貴繁昌息  
 災延命家内安全惡事災難拂ひ給へ清の給へと厄拂得と云ひ並べ祈るばかりが祈るにあ  
 らず心だも誠ならべ祈らざとも鶴の千歳龜の万年枇把は枇把の味ひ梅の味山葵  
 の鼻を弾き山椒はひりつく萬物一として神の宿り給はさるはあし中よも人の萬物の靈  
 といふ山葵の鼻をひじき山椒のひりつくに恥て私心私慾をいらひたまへ清めたまへ  
 神詠に 昔人の直き心も其まゝの神の神にて神の神なり  
 又問安産あり難産あり此考奈何翁曰 人の人を産を見て人の人を産と見る人の人を産  
 の人の人を産よ非ず何んぞ人の力にて人の人を産事を得んや止む事を得ずして云ハ  
 人に因て人の産るゝならん客問 曰是ハ其神の告子彼ハ此佛の告子なぞ昔じより言傳  
 ふ如レ此事も有や否や翁答 曰天下皆告子也何んぞ彼れ此而已あらん禽獸蟲魚草木の  
 出生する一ツも告子にあらざるいなし又問告子あらば人力を盡さずして懐妊する

や日否只居ては懐妊せず其人力本と告子ある事を知つて告子の悟開へし壁へバ田地と  
 種ハ告子也耕と種播は人力なり人力と告子と合体して五穀稔る是即告子也又問告  
 子なれば難産ハ有まじき難産の間々あるハ如何答是皆人力の過る故なり禽獸蟲魚に  
 難産を聞かす可耻一扱人力にまたれ物あり公の人力あり私の人力あり此處見分  
 がたし工夫をめぐらし用ゆべ也  
 其次ハ誰じや

拙者朋友此比金の出入よて晝夜心を苦しめ候此義に付て御占頼たし翁の曰錢かねハ  
 かりを寶と思ひ其實は縛れて命を縮る人多し命を縮る寶ならバ寶なきころまじならめ  
 眞の寶といふ物ハ人々所持する性根玉なり此玉を寶と知らざる人々ハ已ガ勝手の惡き  
 事ハ此玉に環を付而も其環をきづと知らず錢銀に目かくれては玉の光を失ふに至る  
 玉不磨光なし日々磨き又日お磨き明德を研出すべ也古語曰不寶金玉而忠信  
 以爲寶又曰爾以玉爲寶我以不貪爲寶  
 其次は誰じや



弟の義も付て御占頼たし翁の曰御舍弟が何とめされた拙者弟別家いたして七年  
 餘是迄度々世話いたし遣せども兎角渡世に不精にて此際もまた不詰り其上拙者夕異見  
 を不用兄を兄とも思てぬ不所存義絶いたす心にてと皆まで聞かせこれ兄貴君臣夫婦  
 朋友の間にこそ義絶といふ事もわれ親子兄弟の中に義絶といふは何事じやと去る學者  
 が阿られた指がきたあしとて切て捨る敷まづ其元の心底に弟を我弟と思ふ故兄を兄と  
 思はぬをど、瘦肘と張たがる弟何じや親の不便も思召す子で無敷跡から出生した  
 る敷先へ生れたる敷跡先の違ひのあれと皆親の子にちがひ無ひ我も親の子也弟も  
 親の子ありと親の所へ氣を付て親の心で世話せば世話も世話に成まじきや扱又世話  
 にも仕様あらん横町の何兵衛が三百目のかねに詰りて首釣て死だど聞けば知るも知ら  
 ぬも残念がり三百目位の事なれば已に云ひで已に聞たら死なせしめまいと云ひもし思  
 ひもすれどびちく／＼生て居る内に三百目なれば今夜中に首絞て死すすと血の涙でい  
 ふたりとも恥しめたり意見のせふゆれ銀子貸す人の稀ならん其元も御舍弟の世話被召  
 ならハ必跡へんにならぬ様に心を付て世話めされ度々世話をいたしたと言へるゝから

ハ世話の仕やうが客と見へたこれ／＼御腹立られな世の中人の世話をするか人の世  
 話に成敷ニツよひとつのものじや其元が不如意なら舍弟の方うら世話をする同じ事な  
 ら人の世話とするかた々増あれ共皆左様に思へぬものじや舊臘も去る家の主ながこ  
 の病に困窮し朝夕の煙絶間がちなるをさるに堪す米錢少々贈れる人あり其病家の悦  
 ぶ体宛も死人の蘇し如く親子四人の命をつなぐ是ぞ天の賜也とありがた涙を流し  
 ての悦び誠天の賜也悦ぶ体左も有べし又其施す人の天の賜もて常々安樂に暮し其  
 賜の余を以て困窮なる人に施す此悦は如何や或十日敷廿日敷の命をつなぐ米錢を賣  
 ひ涙を流して有難がり悦ぶ人にくらべてハ百倍千倍悦べき筈なれど此所を知らるざと  
 彼所を知らざる故あり知り給へく  
 其次の離トや

夜前朋友と争事あり化物は有る物か無い物か御考給はるべし翁曰聖人の不レ語三怪  
 方亂神一小人の怪力亂神を聞たがるさらハ化物の咄しと初めん往昔／＼長押掛た  
 弓の蛇と化て客を惱せし事もあり腐た茄子が蠶も化て人にどり付し咄もあり又爰に或



豪家何某の妻女病に臥事半年余り勞瘵といふ病よや諸醫手を盡せども驗なく元氣次第  
 に衰ふ看病人多き中よ政といふこしもとあり晝夜病婦の側を不<sub>レ</sub>去介抱また類ひなま  
 飲食起臥二便の扶け政なくして不<sub>レ</sub>調病婦將<sub>レ</sub>死とき其夫よ向て曰我永<sub>レ</sub>の病床子と  
 ても及ぶま<sub>レ</sub>と政ケ介抱願<sub>レ</sub>くハ妾が形見と思召され不便を加<sub>レ</sub>給ハれかしと言還て命  
 終ぬ斯ありて三ヶ日目より婢政病よ臥其症先きの病婦よ粗似たり醫師は勿論諸寺諸  
 山の祈願残るうたなしといへとも定業よや今<sub>レ</sub>頼すくなく見ゆ政が父方の伯父あり訪  
 て曰汝の養生身に余れり難<sub>レ</sub>治ハ天命也有<sub>レ</sub>がたく臨終せよ若し望<sub>レ</sub>わらば云置<sub>レ</sub>し政が  
 日如<sub>レ</sub>仰有<sub>レ</sub>がたき御介抱何の不足有<sub>レ</sub>か望<sub>レ</sub>わらん去<sub>レ</sub>あから只ひとつ迷ひの解さる事れ  
 あり主人身まかり給ひて後三ヶ日目の夜裏へ出しよ先だち玉ふ御主人千載よ立給ひ助  
 憂げに我を招く是をみるより身毛立震付しか病の本明けの夜また裏へ出れハ又前の夜  
 の如く我を招く其後の夢とも覺へず現ともなく唯幻<sub>レ</sub>よみ<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>あ其恐ろしき堪<sub>レ</sub>がたし  
 かく悩せ給<sub>レ</sub>あけり何れ恨有<sub>レ</sub>やらん是の心よかゝるなり伯父問て曰其幽靈もの何と  
 も云<sub>レ</sub>りぞりしか政が曰唯我をまねくの<sub>レ</sub>又問衣服は何を着給<sub>レ</sub>ひしや曰病中の寐まきの





儘籬に菊のお小袖なり伯父の曰汝の病本復せん我あしへに從ふへし今亦裏へ出上  
 前のとく幽靈在り身を棄て側へ寄り何の恨にかく憎せ給ふやと問へ若し不答我を呼  
 べ共に行て實否を正さん政教にしたかひ痛苦を忍び裏へ出干裁を見れを例の如く髪う  
 つさハき籬よ菊の小袖着て恨めしげに立玉ふ絶入ばかりの畏さと忍び思ひ切て歩行寄  
 りよくくこれの幽靈ならず此頃植ま山茶花也髪とこへとは後の柳招どみへしハ爰  
 の枝小袖の模様ハ此枯枝扱ハ心の迷ひなりと迷ひ晴れハ心も晴れ忽ち病平愈して今に  
 存命あるよし聞是しきの化物さへ正体を見届されは病不愈扱又爰に筆の先きで化し  
 口のさきで化す化物あり我等も化物中間なり或ハ君子に化て居る小人もあり衣若て居  
 る鬼もあり長者に化て居るすかん貧もあり此類又世も數多なれども正体見へ透恐るハ  
 に足らず扱又一種正体のとへざる恐ろしき化物あり春は山ハ花を咲してみせたり  
 冬ハ水を氷にしてみせたり菜虫ハ蝶に化て花ハ戯れ卵ハ雞と化て時を告る振袖若た  
 可愛らしき小娘がいつの間よやら腰の屈んだ齒抜姥に化奇麗を若衆か夢の間よ白髪  
 生た親父に化今朝造物いふた化物が忽ち無くなつて仕舞たりきのうまでなかつた物が

何所うらやらぬつと出て聲を上たたり無量無邊の化物だらけ此化物の正体見届されハ  
 見る物聞もの化かされて迷ひを重ぬさわれバとて此正体容易見らるべき物に非ず  
 適にハ此正体見届たと思ふ人あり是も亦化物あり見届たと思ふ目が光る實ハ此化物の  
 正体見貫んと思はハ先自身を見貫べし此自身また見易からず慰半分の學問鼻歌交り  
 の修行にてハ中ハ正体處でなし足跡も見るべからず晝夜間斷なく心を盡し月を重  
 ね年をかさねハ豁然として貫通するに至らん歟孟子曰盡其心者知其性也知其性  
 則知天矣

賣卜先生 糠俵後篇

翁賣卜のいとま机によつて眠り夢魂廣莫の野ハ吟行と春草所得顔に生茂りたる中に  
 麥藁の家有をくる主ハ蛙とおぼまきて諸蟲數多並居たり亭主の好の赤蛙歌の會にやあ  
 るらんと心とまる折しも青漆の合羽着たる雨蛙ヒヨコくと飛出何やらガワく口上  
 のべ案内して先ハ入る主の蛙出向ひ名代の叮嚀兩手を突き雨中の來臨 憚多しかくの  
 如く小虫ども相集り毎く會語致そといえども井の内の我くハまだ大道を不聞希



の教を受ん翁今更我の賣下なりともいれず席を改め見壁に向て曰道可道非二常  
 道一名可レ名非二常名一是はこれ老先生の言葉なりいづれも此常の道は如何見られ候予  
 一人づゝ答めされ蛙あどじよりして日常の會にの問を互に答を廻せども今日は先  
 生在す唯御教示を願ふ而已翁の自然らハ少と御手を上られいさう堅ふてハ咄しが出来  
 ぬ扱其元ハ不斷兩手を突て腰を不レ伸唯感愍に四角八面あるを禮と思へり禮可レ禮非二  
 常禮一汝の外のみ知ていまだ内を知らざるあり姿形を禮といひ且禮の形によらざる  
 る事を譬ていハ親の喉に餅がつまりくるしむ時其子打叩ても危を救はん是不孝な  
 らんか孝ならん歟汝がとき僻見の者の親を打ハ不孝なり叩ハ無禮ありとて驚るをまた  
 ん是孝歟不孝歟安宅の關の金剛杖も忠といわん歟不禮といハん歟嫂水も濁るし時の  
 手を取も不義にあらす禮なりと不レ言や是等ハ外不義不孝不忠よ似て内忠孝よ叶ひ禮  
 に中る蛙の面に水くもしらぬが爰とよく聞れよ是ハ道よ叶あられハ道に背などハ道と  
 挺に違ふ人あり是ハ其道とすべき道よて常の道よあらす道とハ万古不易をいふ道とハ  
 何んぞ本然の妙道舌をもつて不レ可レ言筆を以て不レ可レ書





次あるハ蟹と見れた直ある道を横よ歩行一見識有ての事か蟹道出て曰我ハ心のすぐな  
らざるを耻て形の横さまなるを不恥心直ハすがた形は隨意孝ハ猿が鳥の咄しよ残  
り忠は武文蟹の脊に殘す忠孝ニツあがら全し何んぞ形の醜を恥ん弓のかたちは斜なれ  
と弓の心は直さが如し翁の曰汝も蛙とおなじ事目の付處が違ふてある弓の斜あるは  
則弓の直さ也尺取虫の曲れると伸と欲て也謝靈雲が曲れる笠は汝うとき我儘にハあら  
せ其影の曲れるを見て心を直くせんため也瓜田の履季下の冠皆其形のおしきを飛ぶ  
あり蟹横に出て曰我ハ蓋に金を包む翁ハ塊を錦に包む蟹翁の曰金を錦よつゝむには  
孰

田螺どのくいまた道を聞さる歎死を恐るゝ事人よりも甚し人の足音鳥の羽音うよと  
吹風の音にも門戸をさそ事周章是死を恐れ生を貪るよあらざるや死を恐れ生を貪り門  
をかため戸を閉ても人其門戸共に取て釜中よ煎る要心堅固なんの益や田螺の曰益をも  
とむるよてもなく損せまじとよもあらざ唯我用心ふかきハ人の目の要心深さがごと  
きあり明を貪り暗を恐るゝにハあらざれとも灰が立てもちやつと閉炭がはしけてもち

やつと睡を合する間に髪と入べからず又腰入たる小兒の物おとよびくくするも死を  
恐るゝといハん歎生を貪るといハんか是私ハ不入所釜中に煮らるゝ天也天を知者ハ  
命を失る本より生を好んで生るゝよもあらざ死を悪んで死ざるにもあらざ故に富貴  
も不レ欲貧賤も不レ欲短も欲せず長も欲せず方あるも不レ欲固なるも不レ欲翁聞かけこれ  
く一對いふても濟事やいひならべし不レ欲盡し汝よ於てハ可なれ共いまだ可レ道の  
道を離れす不レ欲をも不レ欲  
次ハ女中の御目付職不義のあるない吟味する守官とハ汝よ如仰歌よもよまれ詩に  
も作られ古き書物の端にも出て御存知の上なれば委細ハ申さず宮女を守るといふ事に  
て守宮とは書侍る翁の曰汝と宮女よ付置よ不義させまじき爲にあらざや然るに汝が黒  
焼は却て不義の媒とるよし翁 夙ハ傳へ聞此云譯有や如何守宮眞黒よつて曰夫ハあ  
とかたもなき空言なり嘘を賣て利を貪る横道者のなす所覺ゆるなき功能書在指にて張  
し行燈夜の編笠明りの走らぬ賣薬店買人のあるもあかまけれ此薬よも限らと近頃ハ札  
廻しの能書よも腎薬とさハいハ買人多しと聞およふ是もあかし事ならずや其腎薬



をめてにして身をほしい儘に持腎鹿火動の症となり終よ命をとり邊山あだし野の露  
と消て行はかなしとやいとん愚なりとやいへん翁の曰夫の先世間の沙汰汝の人の不義  
あるを見出さんとする否な役之其役人の内にも氣と有て少しの不義にてもあれよかし  
見出して己が手柄よせんと隅へまで覗廻る者もあり又甚しき賄賂を取て見免すも  
ありと聞其賄賂取て見ゆるすあどはかの不義せしものと何れか科重くらん又少しの不  
義よてもあれよかし見出して己が手柄にせんととみくまを覗く者人の不義あるを  
よろるばん人の不義あるを悦ぶ者の不義同前の不義あらん扱又律氣一偏よ不義ない  
かもし見落のあるまいかと隅の隅まで窺ふ者あり已れが役目に油断せむ正直なる機な  
れと君子の取らせさればこそ論語に曰く惡二許以爲直者とあり或國の明君目付役  
なる者に問せ賜ふ汝の人の惡あるを見出さんとする職あるり惡しき者を見出さんより  
善者を見出し申出べしと仰られしとて此事を聞者末の民に至るまで其仁徳に服せ  
ざるのなしとかや  
次なるの上稿壤を喰ひ下黄泉を飲といふ蚯蚓との汝よな一寸の虫にも五歩の魂ひある

と聞汝を二ツに斬とき其二ツともも動く何れのかたに魂あるや蚯蚓不答翁歎て曰  
く夕よ道を聞事を得ずして朝よ大道にいで死す教んとするに耳なし嗚呼縁なき衆生  
の渡しがたく蚯蚓勢をつかし長ふなり短ふ成て曰く昔ぞ智勝佛のとき我問ふて曰く我  
等ら何を喰ひて生をたもたん佛の曰土を喰と我其土の盡ん事を恐れて又問も土盡は  
何をか喰ん佛の曰く土盡の大道に出て可死と此故に今に至て夏の土用に大道へ出て  
死をゆえに死も私しならず生も又私しならんや生死既よ私なし況や生死の外なるもの  
をや翁の曰く私無の則ち私しなんぞ私しをまといへん必も修行倦事あるれ  
小暗でフウくいふの誰ぞと思ふたか蚊歎飛行自在の身と成て上の貴人高位の門にも  
入下の野臥かまふこの寢屋にも交り竹林よ遊びては七賢の樂を下目にて餅瑪してたの  
しみ上見ぬ鷲の衆類ひなれども本に此社中水門剩水を大海とし棒一本の身躰さへあり  
廻しが出来かねて七沈八浮嗚呼出世もなればなるものか蚊聲を細めて曰くさのみ羨  
と玉ふべからず翁世間の縁組を見すや挑灯が釣鐘に嫁入して拈掃なるものを着飾腰元  
數多運るを見てはあやかりものじやの仕合のと他の目からうらやめども外がははか



りて内に見へぬ根が釣合ぬ縁組なれば姑小姑へ氣がね多く一家の付合に氣をいため  
 其外出入の者にまを思ひの外心を遣ひ内徒の者よも氣をかねて山の芋が御内義よな  
 りめつたよぬら〜出歩行と蔭口などを聞時身身をさかるとこちならん養子とて  
 其通り能處へ養子に入何よ不足の無身となり結掃事事じやの果報玄やのと余所うらは  
 おもにとも不足があるやら不足が無やられたのしむやら苦しむやら水鳥の浮て居るは樂  
 さふよ見ゆれども足よいとなき世を渡るかな我等も剩水よ住し時の金魚の口が否を斗  
 外になにの思ひなく貧賤にも樂しみありき今出世の身なれども富貴にも又苦しむわ  
 り蚊遣よの薫らふ掃子には追散さるゝとさるゝ片手の聲にも命を失ふ更れハ蚊帳に  
 られ心の儘ならぬを啼明し盡もたま〜顔出せばあはれものよとうとまるゝされを命  
 のかなしさも憎まれて世にすむかひひなければも蚊あいがられて死よりまし蚊翁の曰  
 く汝求める心ある故苦しむ不絶古語に清貧の常にたのしむ濁富は常に憂といへり歌よも  
 韻ひて富る人より韻らひて貧き身ふる心安けれ  
 翁其次の誰なるらんと天眼鏡を以て見うぢ〜するハ水虫ども蚊體少さければ命もま

た短からん汝も生たる甲斐のあるや水虫曰く翁伏見街道を通りて見すや牛もあり狐も  
 あり龜もあり蛙もあり西行もありおやまもあり其外人物貴賤老少僧俗男女禽獸蟲魚に  
 至るまでさまざまの土さいく形に大小あり形に美惡あり美惡大小異なれども其本の  
 一なり命盡て碎て仕舞へまた本の一に歸る我形微なりといはれども万物のひとつ也翁の  
 未生己前と我水虫の未生己前と二ツ歎一ツ歎我命短く翁の命長しといふとも宇宙の窮  
 りなきより見れば毫髪を入るべらんや翁目をひりて曰くちよこさいな水虫ども誰に聞  
 てべり〜しやべるいふものハ不知知のハ不し言嗚呼去ながら殊勝事事じやかな  
 らせ修行怠らざれ水虫再拜して曰く希くハ教を受ん翁微笑して曰くおまひらくは  
 汝いまだ生死をはなれず生死なくんハ未生もあらじ  
 翁夢覺ておたりを見廻し今のものも誰じや不佞數代交易を業として銅駝坊よ住す今  
 故有て卜居せんと欲す先生の卜筮微妙ある事かくれなく千里を遠じとせせして來る乾  
 坤兌巽吉凶如何御考給るべし翁目をすり〜顔をながめ衣鉢を見歎息つゝて曰く愚  
 老は不學文盲よて角な言葉ハ讀がくだらぬ世間通用の丸い言葉で仰られい卜居どハ宿



替の事歎交易といふ商賈といふ事歎商人の能きぬ若たるの不相應なものは昔の物知り  
 がいふて置れた其もとの衣紋付言葉づかひ商人臭い所微塵もあく商人の渡世無二覺束  
 定て内證不如意も成逼塞の變宅ならん客赤面して曰く伊賢察に不逢四五年前より不  
 如意より其不如意の尾を見せまじと氣を賦り世間を張ないものも有願も内徒の者迄  
 化すと思ひの外なる費多く最早バかす術尽此盆前の遊の葉ハ破れかぶれの穴道いり  
 翁の曰く跡へん〜四五年前も貧乏を突出して一家朋友にも相談かけ格式もさげ人  
 も耗し絹が着られぬハ袖つむたが着られぬハ毛綿成様にして渡世せハ逼塞せと濟べ  
 き客の曰く拙者とても是まゝに人の身上仕舞を見て去とてハ不覺悟なりせめて四  
 五年以前にも末のつやらぬ氣がつかハ家屋敷にハ放れまゝと人の志賀からさき見ぬて  
 我身の上ハかゝり水海最少と前から帆をさげて梶の取様あるべきハ槓の廻らぬ様も成  
 今更後悔翁の曰く盛衰ハ世のならひ珍しからぬ事あれども貧乏を突出さるゆる歩行  
 が早い貧乏を突出さるとは錢銀ばかりの事でない萬事ハ貧乏を突出して知るまゝと  
 ぎららるるまゝと見ぬハ見ぬ聞かぬハさうぬる濟んだる事を負債しみの輩ハな

けれども有とみせ知らざれども知り顔して世間の人を欺ども人また相應も直打して  
 虚直のあるないハ見て取り深〜とは買はまらぬさおれハ何の益なきのみ欺一生己れ  
 が心を欺く心苦しき事ならずやよしハ又欺き謀せ万福長者と見られ博識多能と見られ  
 たりとも何百歳か一生ぞや

見る人も見らるゝ人も轉寢の夢幻の渡世あらすや

拙者處用有て旅立いたす明日の日のよしおし考給はるべし翁の曰く晴天なれば吉し  
 雨天なれば凶し曇天半吉もし急用あらば雨天にても立べし舟は危おまものなれども日  
 和のよしおしを見て唇を見ず此所よて可考客の曰く拙者も仰のごとくにて心すめ  
 も両親ともよごまのおよてかり初的事にも案じられ夫故は尋ず之殊も拙者の拙に生  
 し子なりとて親達の氣遣ひしてま〜の呪事棹に生れし子ハかならず短命なりとい  
 ふりゝる事もある事よや翁の曰く我是まてよ棹に生れしといふ人の五十越を五六人  
 も見たり七十ぢのき人にも逢ぬ又拙でない日に生れし人の短命ありしもおまを見來る  
 依之翁は信せまもし又拙も生るゝ子必ず短命なりといハ短命ある子ハかならず生



に生るゝあらん然らば持て生るゝ短命也もつて生るゝ短命を呪い位で長命の覺束ない  
 く客の曰く我等も左に存れども親たちが氣遣ひれ方々願をたて八日十二日は藥  
 師の日かならず鯛と虎とを喰ひ戎の日に鯛ならぬ毘沙門の日に百足を忘れな何んの  
 日のごこの朝詣日はその所の御百度香水でも呪でも聞付次第ごまのこのあへませな  
 れば近所の衆も笑ひ朋友中には呵るもあれどしうらむ呵れ笑ひわらへ兩親の仰にま  
 かせ明日の旅立も有様の願詣翁膝を直して曰く父母在則見其志一父母没則見  
 其行親ある人の行ひの行ばかり見て評判ならぬ其志を見て其孝を知るといふ  
 其元の志翁大に恥入申扱旅へ持てよき守あり餞別に進上いたと孝といふ字を懐中め  
 され此一字をすれされ何國いか成所へ行ても惟我過失のあるまじき事  
 拙者一人の悴離れとすれんとするに忘るゝまなし如何して忘るべき御示給るへし翁  
 の曰く子故よ君父を忘れ玉ふな父母の爲に妻子を忘るゝの孝子のつね君のたれよ父母  
 を忘るゝの忠臣の常なれども太平の御代に願れず近く四十七忠君の爲に妻子を忘  
 れ父母をも忘るゝ能手本なり遠く戦國の書を見て知るへし扱また孝の父母の爲よ天

下を忘るゝ大舜を初とし妻子をわすれ其身を忘れし孝子達和漢ともに珍しからず爰に  
 並ぶ咄しよのあらされとも翁が舊里に何某とて本は所て指折の家なりしが盛衰の習ひ  
 とて今のやうく小女郎獨を遣ひ朝夕の烟も細くと暮しぬ娘あり名の豊十二歳のとき  
 母病て不食す豊寐食を忘れ晝夜母の側と離れず其介抱大人恥し夜更るも忘れ脊と撫  
 足とさする或夜母の曰く我不食の持病なり二三日経ば本復せん夜も更て眠たからん休  
 よかし朝の又早々起て密柑を壹つ調と密柑の酢少しあらば明日に食事も可進去るが  
 らいまだみかん色づか芝賣買よとあるまじき如何して求め得んと辛氣げにいひつゝ  
 兼入ぬ豊の後先のふまへもなく心覺の密柑畑十町余も有所へ畏さ寒さもうち忘れ得の  
 明にたどり付三つ四つ取て懐にす小屋の内より番八見付貢も未レ濟に人の密柑  
 に手を掛る盗人よ所の法よ行んと泣も詫るも聞入れず情なく引立行畑主何某の豊が  
 容儀の賤しからず言譯の健氣も感じさやうく勞り自ら親元へ送り届ぬ又密柑よて食  
 るとぞ日あらずして全快し母子ともに今よあり其後翁問て曰く汝密柑を盗え事親の  
 爲の盗い盗も孝行なりと思ひ盗たる賊客泪ぐとて曰く其時は孝といふ事も盗といふ事



も忘れ唯蜜柑をほしき斗なりしと答ぬ是等も母の爲に其身を忘れしものといわんか  
 拙者近頃は唯もい忘れをいたし忘たままど指を繰れば其指ともよ忘るゝなりもし何ぞ  
 の崇よてゝあるままきや御考給るべし翁の曰く蛙の蚯蚓を見て蛇ある事を忘れ蛇と蛙  
 と見て猪ある事をわすれ猪の蛇を見て獺人ある事を忘れ獺人は猪を見て山の 險を忘  
 る是等の其軀を養んとて其身を忘るゝものあり己れが職もあらぬハ身を養んとにも  
 あらで日の暮るゝも思すれて流れよ立罪も報も害も疴氣も忘れ果て魚を釣る人もあり  
 人の魚釣るをうつかり見て丁稚の使の口上を忘る其使の口上を忘たる丁稚を性根なし  
 と呵る手代も在所の麥飯雑水の事を忘れて此米の味ないの古くさいのけふも又びんと  
 こなのうるめ歎なと、咬く其つがやくを聞て嗚呼何所の手代も同じ事田舎の暮しの貧  
 しき事の忘れ果て青梅島の肩がさとの小倉の帯の腰が重の何んの角のといふこといふ  
 扱く物思すれする者どもかなと笑止がる旦那どのも先祖の辛苦艱難の御陰は忘れて  
 自身の嗜欲よゝ家の衰微するも忘れ妻子にまよひてゝ親兄弟の事をも忘る天恩國恩  
 父母の恩のいふも更なり人に恩を著たる事の忘まじき事なるよエテハ忘れて退るもの

也忘れても苦しからぬハ人よ恩を著せたることなり其忘れてもくるしからぬ思よ著せ  
 たる事いつ迄も忘れず折節の言出して恩に著せる人もあり心が見へて淺まし又賦に  
 色ハ思案の外ありといふ是も忘れて苦しうらぬ事なれ共少この不義過のある時色ハ  
 思案の外ありと道理を付自身よハ少しは赦そ人もあり是等は 可忘を不忘して忘まじ  
 きを忘るゝ人也宿替に女房と忘れたと聞てハ手を打て笑 揮を忘たるを忘れて尻から  
 げしたるを見ては指さして笑ふ其笑ふ人の中にも一朝の怒りに其身を忘るゝ人も有  
 ん必らず其身を忘玉ふな不忠不孝非義非道ハ陥るハ皆我身を忘れたる人よありせや客  
 の曰く翁先にハ可忘を説爰には不可忘を演万事忘れて可ならんか曰く不可也可忘  
 をわすれ不可忘を不忘して可ならん歎いわく未可也天道ハ無レ爲而不レ爲事なし堯  
 ハ天下を忘て天下をたもてり孝子ハ孝を忘れて孝に中り忠臣ハ忠を忘れて忠に合ふ  
 ハ能書者ハ書毎に心を入れざれども 規矩を不レ離よく誦ふものは節毎に氣と留めざれ  
 ども拍子に合ふ魚ハ江湖に相忘れ人ハ道に相忘る  
 某男子三人もつ物領は先十人並み是にハ迹を續す積り二番目の利發者向商賣でも仕



かねぬやつ只苦になるり三之助百姓も出来ぬ鈍物夫故出家の思ひ付渡世の爲には何宗  
 が性よ合ん御考下さるへし翁の曰く剃髪して佛道に入る者の財寶を捨て家を出て日中  
 一食樹下一宿して同ト木の下にも重ねて寝ぬといふに渡世のために出家させ佛を賣  
 て喰なごへの淺間しき親心其元れやうも親があるゆへ出家のうちにも出家にあらぬ出  
 家もあるげな是のろの出家の科でいあい汝の様を親有てぐとんぜもない稚子をたらし  
 すかし出家はと有がたい者はない鋤鉞も握らず歩行荷持する事も入らせ結構成ものを  
 着錆り長老様の和尚様のと玉のよまに乘て敬る親よの生れ増るなごすめこま  
 れ泪ながら剃髪して小僧の内へ世間も知らず何心あふ暮せ共陰裏れぬるでも色づく時  
 の色付るろく美目のよしあしが目よ留小歌三絃が耳よ掛り酒の面白味を覺へ初て  
 りもはやまつ香の香が鼻よ付佛の顔も三度づの勤行に飽果門を出れば極樂じやと寺  
 と火宅の様よおもひ後には親をも恨るよ至る取どけ幼少から尻にするへ他所の目から  
 も氣の毒なものじや發心の出家にさへ情落するもありと聞身過ばかりの事あらへ出家  
 にせずとも心易き相應の家職あらん子が生れ乳が添ふ鈍なもの鈍なり片輪な者の

片輪あり喰分はあもものぞ去ながら父教へされバ子愚あら教れば鼠も酒を買に行扱鼠  
 に付ておもひ出したる叫しが有昔益徳寺の正損として尊と和尚ありけり或日齊の戻りに  
 海邊を通り生海鼠の波よ漂泊を見て歎て曰く嗚呼寐たか悟たか尻か頭か偶く受がたさ  
 生を受ながら目なれば佛像も不拜耳なれば淨法も不聞口妙號を唱る事不能漁  
 父來て突んとすれども逃んとする智慧もなく祖よ乘てもはね廻る方なし鼓に縛られ  
 て一生を終ん危かな現世なを斯のごとし況や未來覺束なしと廻向して歸りぬ其夜海  
 生鼠和尚の枕に立嘆て曰く嗚呼寢てか悟てか僧り俗りまたく出がたき火宅を出なが  
 ら目ゆる故五ツの色よまよひ耳有ゆへ三筋の聲に迷口飲酒妄語を戒む事不能講中來て  
 のさんどすも退んとする智慧もなく乘ものに乗ても自前に拂ふ力なし借錢に縛ら  
 れて一生を苦まめんに小拂猶かくのおとし況や大際覺束なし危かなくと言捨て歸ん  
 とぞ和尚衣にそがりて曰く請願くの教を受ん生海鼠するくへつたり居り我天地を以  
 て一字とそれを勸化奉加れ世話とも入らず上々に本寺なく下よ未寺なく中に旦那なけ  
 れハ納豆の仕込に氣を不入せ和尚我よ耳目なきを憐のども我耳目なき故講中よねすり



言を不聞且那の苦い顔も見せ口なけれバ齊米の吟味も知ず富貴よ心なけれバ大黒を頼  
 請せずよろしくと丸寝して寒暑の憂を知らされバおひりよ氣がねする事なく在所の姪  
 を呼寄されバ疑受る覺なし現世すら如此況や煎海鼠よ於てをやと狙よ水流すこ  
 とく壘かけくいふ壁ばかり麻耳に残り小壘になつて消にけり扱先刻りらの長もの  
 たり皆其元へ異見の爲なり斯様ある浮出家今もありといふよのあらす翁が例の悪口必  
 ず他言多無用

先生けふの賣歟買歟一寸考たのたとし翁居直り誰ぞと思ふたら錢屋金兵衛此間もい  
 ふ通り不賣買の壽命の毒足下親からの商賈といふでいなし殊に親もあり妻子もある  
 身もし手合が違ふて負て仕舞か氣でも打て煩へバ其もとの其元おれども後の難義翁の  
 交易の道を知らされバいふの近頃慮外ながら先不賣商内といふ名が悪い爰へ出合ぬ事  
 歟えらねぬ孔子の盗泉の水を不飲曾子ハ勝母の里は不入是皆名のあしきを惡み給へバ  
 也賣ての仕合買ての幸ふろ交易の本意あらめ賣人に徳を得れば買人は損あり買人徳  
 を得れば賣人損あり近ふいへバ勝負事同前の賣買汝勝たハ人負ん人勝たハ汝負ん汝負





なべ汝の家内流浪とべし人まけべ人の家内流浪せん家内の流浪も不慮人の流浪も不  
 願は是不仁の至りなり不質商内との最負口不仁商内といふて可ならん是の翁が例は  
 悪口言過しは御免われ客は曰く拙者の御存知の小膽故米に掛らせ金の相場は幾つ  
 慰みかてら致せども如し仰壽命の毒相場事よかゝるもの胸をいためたり血を吐たり  
 心痛とやらで死んだもありそれ程にまで身を入れて立身すればよけれ共立身するの稀に  
 して多の皆潰れて仕舞翁のいとく貨悻而入者亦悻面出といふ偶々立身仕たりとも仕  
 舞も又早からん夫の時の運ともいへ愛よひと切問事あり命が尊いものなるか足一本が  
 尊いものか客顔をながめて曰く翁何事を仰らるゝぞ手足も大事の代品物なれども命よ  
 競べらるべきか又問足一本給らば陶朱倚頼がごとく富さんといはば可賣か曰く唐日本  
 よりくれなき富を得ることも足なくて何の樂と翁曰く命に競ては直打の低い足でさへ唐  
 日本にかくれなき陶朱倚頼が富にも替へぬ然るよ手足にくらべては遙々尊い大せつな  
 る命をば幾十日前歎廿日前の富も替るゝいかなる事ぞかゝる人世間に多し賈賈下手と  
 いんか上手といわんか素人目に見ぬぬ

動なくおのれころのチンラが沖にかくれ住まつくる黒なぐる鬼との偽り頼の四條  
 川原徘徊する乞食で有ふがなコレハ見通し様でござりまするか私腹からの乞食  
 でもござりませぬ少しの心得違よりかよおな淺間しき形も成ましてござりまする翁曰  
 く片輪歎或は孤獨なんぞは是非なく乞食となりもせめ汝五臓不具にもめらす何業でも  
 仕りぬまじきかつやくにて非人仲間へ陥るとい嗚呼天なる歎時あるか乞食かぶり振て  
 曰く天よめめらす時にもめらす皆私かなす所なり乞食よはあるまどき非人といわれ  
 まじと人らしき心ありて乞食にのなれませぬ翁の曰如何様乞食よも大体をばなら  
 れねと聞深き傳受も有や如何乞食身よりして曰格別ふかき秘事口傳もおひまませぬ唯  
 友を撰にあり善友に交りての中へ非人にのなれぬものあり悪まき友を友として酒  
 も飲習ひ虚もつさあらひ窮屈な事を嫌ひ夜遊びを好き小博奕も打覺へ第一親の旨付を  
 きかぬ様よし伯父叔母の異見を不用乞食にならねばならぬ様よ身をもて終に乞食  
 となるもの也奉公人も同じ手段最初いあしき友に交りまづ新地俵の字の味を覺へ影日  
 向を第一にして小宿よてハ賈賈仕習ひ三弦もチツクリかぢり習ひ次第に塗に塗が付上



達するに從て主人番頭の目を披覺へ請人に預られても恥を恥と知らされぬ直さんと

五十二

する心なく宿の伯母までむごうだまし後にいへ所さへ何よもあしのてんつるてん是  
でも乞食よならせん天か時かと可疑翁小童を呼で曰く米でも錢でも遣つて歸せ賊  
よ水の方圓の器ものにしたがひ人の善惡の友よよる彼等も友よよらすんの乞食迄よ  
あるまじきたとへ氣質の人並よめらす共麻の中なる達を見よ能人よ交て人の人たる  
道を老らば非人とい言ひれまじ必ず余所の事での無乞食遠きよめらす人のふり見て我  
振なをせ子曰三人行必有我師焉撰其善者而從之其不善者而改之  
拙者普請と致すよ付御占頼たし一昨年までの親共の代其時も只今も人數替りあけれ  
ども諸道具も漸々よふへ何角に付て狭くもわり勝手もあしく建直す積り也翁の曰く鬼  
門あさがりの事ある歎是の世間なみに除たがよい夫の鬼もわれ先三年父の道を不改  
と孝と可言どの子曰に見えたり是まで親の仕來りし事の内にて善事のいふよ不及も  
し不勝手なる事有とて改めざるを孝といふ殊も親の代から夫なりで濟だる家堪忍せ  
ば堪忍ならぬ事のあるまい譬五間三問廣ふなつても欲には限りのない者よて觀問有て

も今一間足らぬ客の曰く此思ひ付今更の事にあらせ親共は昔かた氣の普請きらひ夫故  
云出しの致さねども四五年此かたの心工と翁顔をなかめて曰く然らば汝我代に成たら  
愛を斯せん彼所をも斯すべしと心の底よ工面ありしが夫は近頃親の死を待かねしとい  
ふ自分其氣あらひ親の手馴し諸道具も賣散し自分の好よ仕替る氣り去とて其加しら  
ず扱又能人の格別老や我朋友何某先年病し時ハ我訪て曰く足下の病輕症なれども再  
三の事なれば侮られざるしは老母よ先立ハ歎とのけん不孝よめらすや母老母を見送ま  
での大事の身なりと養生の事くり返しひし時其病人不豫の色見ゆ扱ハ我多言あるを  
厭ふかと首尾あしく歸りぬ其後日を経て問て曰く足下いつぞや不豫の色ありしハ如何  
なる故や彼何某の曰く老母を見送るまでの大事の身こと仰られしが氣に障りぬ親に先  
立ハ不孝なり歎きを掛るハ否なれども親を見送る事ハいつまでも猶否と逆さず事ども  
いへ不孝ともいへ老母を見送らんよりハ我身を見送くるがましなり此已後かゝる扱  
撥必ず遺慮われがしと打込れ赤面せし事ありき汝とて雲泥の違ひ汝も能人よ交りて人  
の人たる道を聞れい相應よ暮し當分不自由に無人の學問せいで済だ事のやうよ思は

五十三



とも己れが好きな事か嫌な事歟災難も逢歟困窮するが何んぞ事にあつた時學問の力無  
 ては欲も迷ひて邪路に陥る扱又其元の道具好と見へず諸道具も過たるの猶不及が如し  
 掛物なども唯一幅なれば盆も正月も祭も其一幅よて不自由ある事なし三幅か五幅  
 持と早不自由に成ぞつとした法事の掛物か一幅欲への庚申待のがないの戒講のが足ぬ  
 のと不自由だらけ花生なども同じ事膳椀重箱の類も其通り員重なれば却て不自由な是  
 も修行まで道を知れば有ても不自由もなく無ても又不自由になし扱此間或人手單筒を  
 求めしとして予よ見せて曰く是のある大家の拂ものにて今新に調へを五十兩も出すべき  
 を我等下直にて求しなりかりろめの手道具さへ如此の結構づくめ金具斗に十金も掛  
 りしよし是何とに奢らせの大身躰の潰されまい分散めされしも断なりと語りぬ予が  
 曰く人の過を見つゝ其又道具を求めらるゝ其元の分散の下稽古でもめさるゝかど例  
 の悪口いふて笑ぬ  
 翁童子を呼ぶ此次の離る  
 我等年よつて堪忍情なく内徒の者を呵ると聞て隣の人はいゝるゝよゝ其元の堪忍情を

く家内むつましからざるは年のよつたばかりでなひ學問の無故じや學問せよと有よ付  
 手の筋を見て貰ひに参つた我等がやうな只の親父も學問の出来る手筋有や御考給ひる  
 へし翁の曰く學問せうと思ふ志ざしさへ出来たらバ外を尋るまでもない近い所よ能師  
 がある我身の上を定木よ召れ人我親を敬ふて下さるが悦ばしく我又人の親を敬へ人  
 の深せつなるが嬉しく人を深せつにし上たる人よしかられて心よからせり下たる人  
 を呵らぬやうにし己れが不欲所を人に施す事なかれ内徒の者の思ふ様に廻らぬの穢い  
 所へ手の届かぬやうなものじや自身の體を自身の手でかくさへおもふやうに廻らぬ  
 ものを人々痒い所をかくやうには行かぬ等々や人々腹の立いで済事じや腹立まいと  
 おもへども折節の腹立て怒り言と跡よての立まじき腹立て人よも腹を立させたを悔め  
 どもまたしての腹をたてる大酒の毒なりと云事の人も言自身にも覺へ大酒はせまひと  
 おもへども折節の飲過し薬の針のと騒た人よも呵られ自身も懲りてもいや一生大酒の  
 せまじとあどにての悔めどもまたしての飲過し又しては飲過す我心さへ我思ふやうに  
 の行ぬものをましてや人が思ふやうに行へまかまづナンナンカンハいらぬかんよんの



四字から修行めされ堪忍情のないといふ我儘よて堪忍のならぬといふ事のないもの  
 子春寒いと秋飢いの堪忍のならぬものにはうしからいふてあれは是とも堪忍するこ  
 まひする扱又本人にも合点させず皺をよせたり白髪にしたり目をのすめたり齒を抜た  
 りちようさいやうよまられても堪忍せねのならぬ事にはどんな親父も堪忍するやに  
 よつて堪忍のならぬ事ハ無ものじや扱て今も言しごとく我心さへ我思やうに行さい  
 少の其我心の全跡を吟味とるがまづ學問の第一なり工夫してまた御出  
 私ハ田舎の百性悴を奉公に遣し度うねて知るべの方を頼置唯今建て登る所幸の見通  
 様何商賣が相應すべき御考給るべし翁の曰く商賣の相應不相應ハ我等よ聞て結句邪  
 廣に成事があるものじや是ハ先頼置し知るべの方へ落着てとつくりと相談の上極るが  
 よかるべし歳ハ十一歳ニう奉公の口ハ何ばでも在ぞ扱親父との四五年も奉公させまん  
 まと用に立時分に呼戻す智恵付といふよふ事でないか其手も間在と聞たが是ハ甚  
 だよからぬ事じやたとへ主人と相對の上よもせよ京の能事を見習ふて歸るハ田舎の間  
 じハ合ぬのニ歎氣ばかりが高ふなり着物や食物に不足といひ後にいもてめをせよ

のじやげな兎角百性の百性舟乗は舟のり田舎に住者のやつぱり田舎仕立がよいげな親  
 父の曰く私共ハ纒田畑十反足らすの百性よて三人の悴を持是を三ツよ分て譲れば三人  
 なから一生身を粉にしたらかざればつたいも喰れぬ身分夫を不便よ存るからせめて  
 壹人之奉公致させ末の出世を願ふばかり中々榮耀でいござりませぬ翁の曰く焼野の  
 雉子夜の鶴子を思はざるものはなし去るが可可愛さも裏へ廻れば姑息といふ憂よ成り  
 ならず甘ひ毒を喰せまいぞどり分奉公する子の親の甘がきつひ毒や苦藥を用るが  
 能書ま妙惠上人の庭の草を鹿の來て喰ひしを上人見たまひアレ打よ抛よと聲あらく下  
 知をなし自身にも杖振あげ情なく追給ふ弟子衆驚き常に替りし師の振舞ものにくるは  
 せ給ふかといひあけり上人聞召れ人に馴させまじき爲なり人なれて里へ出なば終よハ  
 人よ命を取れん不便よいたく打せしなりと仰られしとかや其元も子が不便ならハ熱  
 灸を居たが能扱息子よ今親父の云ハれし事を覺へて居るか在所よ居てハ鋤鐵に泥まぶ  
 れ味ないものを食よこれたる物を着て一生辛苦心勞をせねばならぬ親ハ夫を不便にお  
 もひ奉公をさせるのトや必ず親の心を忘まいぞや扱夫におざる手代衆も能序じや爰へ



出ては聞われ面白ひ咄しがあるサア〜つ〜と寄て聞給へさる手代二三人遊所よて遊  
 女藝子よ戯て曰く此京中の遊女藝子東西南北算へて見ハ夥敷數ならん其内に請出  
 されて片付ハ百人に譏四五人あるかなしろの残りの色達の何になるヲ蝶よ成て飛去と  
 いふ沙汰もさかず蟬よ成じとて脱空も見え古物店や干寛とせにも手の振たおやまじや  
 の足の折た藝子じやのと出てあるをも終に見ぬ何處へ消て仕舞やまど不審立れば遊女  
 の曰く仰の通遊女の數も多からんが去ながら京中よ勤てござる御手代のしめに競べ  
 ハ百等んのひとつもあるまじ其夥しき御手代衆の中にも首尾よく宿遣入なざるハお  
 かたハ百人の内に十人歟十五人廿人にと足らぬげな其残りのかた〜ハ何よなつて仕  
 舞やら仙人にでも成なざるハハ髭も剃髪變も結髪木の葉衣と言ひさうな物を着て川原  
 に寝てござるお客を見たといふ人もありてつかい仙人のやうな形になつて歩行てござ  
 るお方をハ私も折節見もしたが皆々仙人よ成もせまい何處ぞに遣入穴でも有歟不審な  
 るハこなたよりあなた方の御身の上末ハどうなる事じややらと藝子ハ三味せん引立れ  
 ハ三人の手代共少しハ辭が醒たやらこそ〜遊て歸りけりいかさま遊女のいひし如く





此夥敷き手代の内首尾能宿へ遣入は稀にして多くはまじつて仕舞と見へたり我身を  
 忘れし者ども哉其我身を忘るゝ本はといへば親の心を忘るゝゆゑなり親の心を忘るゝ  
 故不奉公して流浪したり金などを遣ふて欠落したり親の心を苦むる手をもつて殺され  
 る親の命を縮むる不孝如此人々いたとへ利發に有ふが算筆に勝れふや廣世界に  
 處の有まじきそ扱きた親の心を忘る人は不奉公して流浪せば親に苦勞を掛るとおも  
 ひ陰日なたなく大事に鞠喧嘩口論して人に疵でも付る歎身に怪我でもある時親の心  
 を痛むと思ひ随分物毎に堪忍して負て居る様に身を持病の案じるとおもひ不養生  
 せむ浮雲所へゆかや唯何事も親の心にまかす故少々鈍でも不器用でも主人にも見捨  
 られや朋輩にも憎まれや身も治り出世もする翁か悪意中の手代なる者廿五歳のとき半  
 年も立ざる内に其主人の夫婦共に病死す後は三才の男子ばかり此手代是を守立相續せ  
 んと心を碎き主人の一家一門へ此趣を願扱また己が舊里へ行て親兄弟にいとまを乞  
 敷て曰く我等四五年の内に宿へも遣入兩親も安堵させまし兄弟の心便にもなるべし  
 と樂みに思ひし處存よらぬ不幸に逢主人御夫婦に離れ述どりの幼稚なり甚だ家の危き

場所我及ばぬながら後見して迹相續を希なり然れば宿遣入の事ハ勿論此後舊里へ御見  
 舞申事も稀なるべし此義御許容下さるべしと涙を流しての願此時親の心に成忠義を感  
 じて悦ぶまい歎息まい歎其後此人大酒せむ飽食せむ賣用にて急なる時も矢橋を渡らや  
 馬に乗らや常に曰く主人生長するまでハ我身ながら大事の身なりと養生堅固に勤めし  
 なり是を聞親の心安堵せざらんや悦ばざらんや是等ハ親の安堵するやうに身を持親の  
 悦ぶ様に行ふ故忠も立孝もたち我身もたつ此所斷味なし

此人夏ハ丹波布を着冬ハ木綿の外身につけや万事質素にして家業油断なかりしゆへ  
 家益了繁昌して今も猶あり

是なるは拙者竹馬の朋友にて本より愚痴にはなき人なれ共此夏愛子を先立てより此か  
 た其子の事のそくよくおもひあのみとく憔悴に及ぶ何とぞよき御考ハ有まじきや翁  
 の曰く其元は我子の死だを死まじきものゝ死だやうに不思議に思ふか客の曰く如仰  
 日頃病身者ならハ其等共思ひあきらむべきが無病なる生れ付にて痲瘡麻疹も輕ふ仕上  
 り其後益と達者にて風ひとつひうざりしに中暑とやらいふ病をうけふと目を見つりて



空しくなる是が不思議にあるまいか翁の曰く死んだばかりを不思議におもひ産れたら  
 不しぎに無賊生て動くは不思議にありせや汝に限らず人は唯、鳥や蝙蝠などの晝は大  
 山を見る事あたはずして夜は蚤をとり蚊を取と聞て不思議なりとおもへ共自身の目  
 ようさまくの色を見分るを不思議にはおもはず唐茹の辛いはいなる故予砂糖の  
 甘は何故予と不思議がれ共其味を覺る自身の舌をふしぎなりといおもひ何ひとつ  
 不思議にあらざる事なければ共不しぎなりと思ひざる故死だ斗、不思議に思ひ彼是ど心  
 を痛る産れたをも不思議におもはず死だとして何ぞ憔悴するに及ばし朋友の曰く翁の  
 仰らるゝ通死も不思議生も不しぎ福もあしぎ福も不しぎひとつく押てゆくに何  
 一ツ不思議にあらざるのなけれども空すべりして不思議と思ひをまづ自身の視聽言動  
 を初め何か故に視何が故に聞何か故に言何か故に動何か故に如斯さまくゝの事を思  
 ふぞとひとつく不しぎを立不思議一遍に成て起居も忘れ寝食も忘るゝばかり力を入  
 て工夫せむとこそこのしでの其不思議の底ぬけてこつたまらぬハ月も宿らぬといふ場  
 所に至るべき歎翁の曰く是もひとつの工夫なりさりながら疲力にて何とかわらむ扱

また憔悴の其元も死んぶ子の年ばかり算へやとも何にても不思議にないもの有なら  
 尋出て持てゐざれ

某し此あたりの數醫にて醫道の本より師家われハ聞に不及渡世の事に付御考顧みた  
 し療治の凡口に糊とる程の事ハわれ共外の家業と違ひ家居衣体を張とまざれば賣が鈍  
 くハり込バまた造用に負詰る所ハ杉原の反古と辛勞と利になる斗り如何せば安樂な  
 らん昨年やうな麻疹が年毎に二三度づゝも流行すれば能けれ共偶くゝの事なる故去  
 年の儲け却て今年の疔癬になり按摩とりに至るまで格式が上す遂取ならん風邪と麻疹  
 の勢ひに是まで裏屋で濟んで來たも俄に表へ出かけるやら小家なりしも急に大きな所  
 へ移り要心桶を杉形に積格子こまよせを自前に張込無僕成しも供をつれ一僕ハ二人  
 供にし二人もつれしにかめに乘て押も有夫に付てハ古借錢も濟さねハ合點せな疊まつ  
 て有し妻子の仕着せも逢た時肩脱を拵へ其外疊の表替襖の張替何の角のど物入多く  
 財悖て出て仕舞残りし物の格式の上つたと買物得意の殖たハり甚だ難澁翁の曰く  
 夫ハ修醫者而已に限らぬ奢りにハ馴よき物也ある所に水つきの田地多く有て水年にハ



植付の出来ぬ村有夫故定免に被成下十年の内三年満作なれば賑ひ二年なれば困窮す古

六十四

き人に聞合すに四五十年も其通り然るに四五年以前迄満作七年つゞきし事あり一村の賑ひいふべからず扱其翌年一秋不作なりしに一村甚だ困窮せしと聞及ぶ是をいかにいふに其所の人の曰く我等が在所に傘木履も家々にいなりし村なり七年満作繼さし内に日傘草履下駄のない家もなくうさね草履蛇の目傘位に朝腹の茶の子にもさしかけ髪かみの銚しやうから身の廻りだんだんと奢おごが付困窮するも不しぎならぬ百姓ひやくしやうの質しつぱくなるものなれ共奢りに馴安なつやすき物なりとかたりぬ商家も年々延のびる身体しんたいの危あやましめる年々余り或年あるとしの不足家たふさふけころ却かへつて長久ながひさなるものなりといひし人有是も心得こころえに成べき事なり野醫やゐの曰く余所の渡世わたせの聞きに參らぬ我問所の答如何翁の曰く渡世のために療治れうぢせされ療治をして渡世にせられ難かたきを先まにして得るを後にせばさのみ奢りにいなれまじきや翁童子おんどうしを呼よんで曰く暫しばらく人の絶間たふまなるべし汝も休やすめ我も残のこした夢ゆめ視みんと又凡おほにまたれて眠ねる蝸牛かき出て問ふて曰く我左右の角つのに國くに在あるに常つねに争あふといふ事古書こしょに視みへたり如何なる義ぎと問人とあれ共作者きやくしや其心こころを知らざればいまだ不答如何こたへ侍わらわらん翁の曰く

是こゝの人身じんじんの數かず少すくなる事と悟さとらん爲なり汝も井いの中なかれん中なかなれば大海たいかいの知るまじ世界の隈かぎりなき川がはと晝夜しゆやをそてせ流れ入いれども益えき事を不知し早はやつゞけ共滅きめつ事を視みず是こゝにて大海の大海たるを知るべし扱あつ上う視みれば程ほどなし天地四方の大なるは又々不可い斗と其計けいべからざる中に此大海の有り纏むすなる潦水れうすいの如し又下を見れば程なし其潦水の中に國々のあり大倉おほくらの稗米はいまいも鹽粟えんぼ散邊さんぺん土つちともいふ又書海しよかいの一粟いっぼともいひりこの粟一粒の中に塵ちりもあり天竺てんぢくも有あり日本にっぽんも有ありまづ日本にていふ時とき六十餘州ろくじゆしゆ其六十餘州の中の一ヶ國に又一郡いっぐん有一郡いっぐんの内に一莊いっしやう有一莊いっしやうの中にまた一村いっそん有一村いっそんの中にも貴賤きけんあり貧富ひんふあり大あり小も有ありてそれ〱の家を構かへ某たがひの何なんの何某拙者たがひの何屋何兵衛なんやなんべゑなど我慢がまんの角つのを振ふ立て互たがひに利あを争あふ事汝が角つのに國くに有ある争あふも譬たとへたり我より又汝を視みれば僅小指ひつがこさゆびにも足たらざる家を我われの顔かほに角つのの目めだつはりなかりける有あるさまかれ蝸牛かき角つのを引ひこめて曰く我昔是を聞道きこを知るもの小をも寡せうとせむ大をも多おほしとせむ得るも喜よろこびとせ失うふも憂うれしとせむ生なむ福ふくとせむ死しも禍わざはひとせむ翁手おんてをあげも不よ能よくママ〱休やすめ翁婦おんふ嬪ひんを見問みて曰く蟬せみの飲ので不く食く蠶さの食くて不く飲く汝食く飲く未い其沙汰さたを不く聞き何を食くふて



樂とするや、姑婦の曰我聞常に厚味に飽人の厚味に馴て厚味を厚味としらむたま〜  
 厚味なきに逢へ樂まず常ニ鹿食に馴るゝ人の鹿食を鹿食と覺てして鹿食とたのしむた  
 ま〜厚味ある時の又甚だ樂しむ是れよよつて見る時の貧乏のたに樂と多飲翁は曰く  
 然らず道を知さる人は貧乏れを苦み富でも又苦む道を知るとき富でも樂み貧ても  
 またたのしむ翁道を知つてたのしむとにあらね共常にへらぞ口をいふて笑ふ先金銀  
 を持たされハ盜賊の恐れなくかねの無心言掛られても有ものを無顔して貸さぬハ底  
 氣味あしき所あらん無を無といふて仕舞ハ底きと悪る事もなし寺社の奉加帳るとに  
 も銀持衆の五兩三兩付れたをハ不足に思ひあの身体にて五兩三兩ハ何事トやせめてコ  
 レ位ハ付さふなるなりと譏る人もあれと一等が百錢二百錢付たをハ納得して誰れも  
 譏らぬ千貫目持が俄に五百貫目も損をせハ石で手を詰めた様に氣を痛めん持たぬも  
 のハ目うら視てハ殘つて五百貫目のかね持たれハ結縛なる身体氣を打事ハあるまじき  
 事なれ共持たが病か心を苦しめ胸をいたむる翁ハ終に持て視されハ此くるしとかりて  
 なし家屋敷をもたされハ替替根繼の世話もいらぬ借屋住の忝さハ町内に小事が出来

ても知らぬがち捨子の時も氣を揉や倒者が有ても苦にならぬ諸道具も數無ければ宿替  
 をそるに世話數無小借家の事なれば夏ハ暑にこまれども是も下見れば程なし又一段我  
 等より小さい所に住人來てかゝる家に住んでこそと羨し事あれハ暑さも又堪忍安し  
 扱方〜に店や掛屋敷を持し人の耗ぞ口を聞ハ赤紙の付た狀が來ればもし出火にてハ  
 あるまい歎と見ぬ先に胸が踊り船の怪我でハあるまいかと聞ぬ内ハ心遣ひ大なる所ハ  
 大きな風何の角のと心勞多し誰がためよかく心勞そるぞといふに吾等夫婦に子一人纒  
 三人の口過せんとて大勢の人を抱へ人形遣ひの人形に遣はるゝごとく年中此人に遣は  
 るゝ如し此して願以此功德何が徳死るとき次の間てひる〜言者の多のと舞體が賑  
 やりなはかりなり人數多有たりとて病時取減では煩ハれぬ山海の珍味をならべても食  
 處ハ口に適ふに過せどハ昔しの人の耗ず口我れまた錢なしの悲しきハ初蒚子とて價の  
 高い未味の無所を喰事のならぬと淺瓜のはしりとて苦い内を賞齋せざるハ不自由な  
 れども最少まつて直の安いやんの味の付た時食までと思はば是とて苦にならぬ苦に  
 ならぬ事を苦にして苦をするハ苦をする事の好が苦をする是も又耗ぞ口



上檀よ新ある筈をもふけ數多の婦に傳れ桑の葉を食ふ者あり翁歎て曰く虎の文有  
を以て射られ蠶の糸ある以て煮らる漆の漆有を以て其身を削られ槌の不材なるを以て  
其身完し材あるもの其材よたをれ天年を終ざる事のはるなさと翁頭を上げて曰く材  
不材の天なり欲する事無して然り欲して然るものならば誰か君とならざらん誰か奴婢  
となるべきや誰か富貴を欲せざらん誰か貧賤を可欲目我母の胎内を出しより人の提携  
抱負よ生たつ是欲して然るものあらんや生長の今に至りて晝夜の撫育親の子と見るか  
おとし且暮の祿を賜るゝ又君のごとく臣のごとし翁の曰く女は已れを悦ぶものの爲に  
容士は已れを知る者の爲に死すといふ汝此語よ泥る歎何んぞ功成名遂て身退かざ  
る蠶惻然として曰く我微臣なりといえども何ぞ豫讓が語を事とせん彼れ范中行氏よ事  
し時の范中行氏遇れ我に衆人を以てす故に我報之に衆人を以てすと云て怨と不報  
其後智伯よ事し時の智伯我にあふに國士を以てす故よ我報之に國士を以てすと云て  
身に漆さし肩を去り瀾と成乞食よ化非人敵討の所作事彼が忠義の現銀商算用詰の仕  
打あり芝居好の藝もやとらん賢の武士に無事一又范蠡が身退死しも勾踐の人とな

り苦をともにして樂をともたせざる氣質を知つて身退く是等も一季半季の渡り奉公  
普代の臣に無事なり我等小身ありといはれども代々祿を賜りて父母妻子安穩よ暮す事  
賊に命の親なりといふも中一恐れ有父母の頭のぎりから妻子の足の爪先まで君  
の恩澤染込めぬ數代高祿を頂戴すまは馬に乗るも道具振らすもおまたた供廻り召連るも  
皆君の賜なり衣食住の本より武器馬具と初とし紙一枚筆たかし鶏犬を蓄ふまで君の  
賜にあらざるゝなし代々産るゝも葬るも皆君の恩澤なれば諫て用ひ給へぬとて退く身  
の有べきや三度諫て身退くさんとゝハ毛唐人はいざ知らぬ神國の武士に無事く  
翁密蜂の聞げに飛かふを見て問ふて曰く百花を採得て密とあし辛苦して誰が爲に甜  
からしむる密蜂振返つて曰く天地万物を生して誰が爲といふ事あらんや家も一箇の小  
天地あん子誰か爲と答ふべき人又小天地よあらざるや然るよ翁は耕す事を知らず妻の  
織事を知らず一物も産出さずして人の辛苦を費すのとなり奈良茶一飯にても何ヶ國の  
人の辛苦ぞまづ米何國の人の辛苦よて出来し物ぞ薪は何國の山より出ていゝなる人  
の辛苦成る搯何國の浦人の辛苦よ有けんと言もて行ハ朝夕に何が國の人の辛苦を



費す事や翁赤面して曰く恥らぐ我れ一物も産出す事無して飽まで食暖に衣て遷居す是禽獸に近しといはん蜂の曰く翁さの愛する事なかれ四民の外に遊べども賣トを以て業とせせや未耜を取せといはれども銘々の家業も怠らざんば則是耕あり算筆よて耕あり鋤飽よて耕も有皆耕なりもし事耕に怠るときは五穀不稔困窮す常体の人困窮すれば思はせ父母への孝もかけ一家中朋友へも心の外なる無禮も出来る他人にも氣の毒なから不屈なる事もあるものぞや其又甚しき者孟子の所謂放辟邪侈無レ不レ爲よ至る兎よ角家業も怠らざれもし又た家業も不レ怠私無ての困窮ならは是予天ありなん予心を苦しめん翁も我も小天地人をもつて天よかたされば人を以て天に負され翁の曰く汝が言甚だよし去ながら言事易行事は難きものなる人の患難を愛ふを見ては何ぞ愛とするよ足んやと云人の困窮を恤を見ては是なん予恤とするに足んやと言て一擧有げある人も自身もし其患難もあふ歎困窮するに至ては眉をひるめ色を喪うるたもるものなり汝も我もまやべりなり不レ慎あるべからん論語に曰如く言を誦して行ひの敏うらん事を欲すべし又曰古者言之不出恥三奈之不逮也

虚空に聲あつて翁と呼誰なるらんと見返れば漆樹片邊に立て曰く翁先に漆樹よ漆あるを以て天年を終ざるに譬る何んぞや漆樹に漆有る人よ人の心有かおと漆樹よして漆なく人にして人の心なくんば如何性の善なりと自慢めざる人の内にも體の人れうたちにて心の禽獸なるもありすがた物ごしの女らしめて心に角の生たるもわり漆樹の漆に耻ざるや翁の曰人に人の心なき人に人の心無よあらざん人其心を失へばなり譬其家よもあらせして己れが得手の妓藝に凝り家業を忘るもの如し好ころ物の上手に成終よ親の名跡と捨て其藝に陥り藝よ身を助けられ世と渡る人もあり是皆其本を失へばなり漆の曰く其本を失ひ妓藝よ沈み色よ溺るゝなんどどの非情に無事なり有情もあまり情が過れば妓藝に沈み色よ溺るに中にも恐ろしき物の天井の色なり武士も町人も老たるも若さも僧も尼も現世未來を取失ふもの只色なり京大坂江戸あどへ息子や手代のしく老りを聞よ百人が九十九人半までの皆色あり恐れても恐るべく慎ても慎べき色あらばや非情も又連理の枝わり相生の松あり竹に女竹男竹あれども終よ心中して死だといふ咄しも聞りぞ欠落またる沙汰もなし夫故の小



松が生長しても竹の子が脊尺が延ても親々の氣苦勞あし人八百屋七の芝居を見ては  
 泪を流し親にも見替身も替男と思ふ貞節家も火を付てなりとも逢たい見たいと慕ふ  
 心根去とていしやらしい近年の色事有がたい忝いと頑負して堪そやす我等非情の目  
 から見ての取り所もないいたづらもの娘故に難義する親の苦勞の何とも思へば義理  
 あるかたへの嫁入らずして内證にて男を持其男も逢たいとて家に火を付るとい言語に  
 絶した大悪人世間の娘の風上よも置れぬ女是には無理な道理を付悪人といはせめて  
 貸たかねの催促したり嫁よ何しと望者をハ戀の邪廣する悪人じやの敵役じやのと後  
 敷からも場からも憎むおかしき人の心ならずや去る先生客に誘われ初て芝居を見られ  
 し時ある人誰の役者を敷上手と御覽せられしと問しに小川吉太郎といふ悪人方こそ上  
 手なりしと答へられしも誠に先生ありとありたく思ひきたとへ野の末山の奥  
 どんな世帯も苦にせまいと一口淨留理語るを聞いての涎を流し是等誠の感知りかな親よ  
 の勘當請るとも思ふ男と二人連欠落して女夫になり仕馴ぬ辛苦も厭はぬとは可愛らし  
 き心ぞやと後先見ずよ譽るのどうじや第一不義なり不孝なり是でも色か戀知り歎と齒

に布着せず問詰られ盲黒めん言葉なく翁漆よ負て閉口  
 嚙罷り出て曰く翁何を敷教んとす我教をまたずして土を潜り學はずして水上を行習せ  
 れども少しの飛人又教を待ずして乳を吸學はずして泣習いざれども笑惻隱是非の心あ  
 るも教を待て求めたるものなる歎先生何をか教んとす翁の曰くなる程汝が言のごとく  
 教を不待して泣學はずれ共笑ふ事人皆然り然りといへども其然る本を知らざれば泣ま  
 じき事に泣笑ふまじき事に笑ふ惻隱是非の心も習はずして人皆是あり然りといへども  
 其本を失なひざる人又すくゑし磨而不磷涅而不緇の聖賢の事よして小人のたゞ  
 朱に交れば赤ふなる或僧我に語て曰く予本獵人にて有しが幼少よて始て小鳥を撃しと  
 き其鳥の苦しむを見て流石惻隱の心あれバ心よ快からず爲まじき事をせし事よと悔  
 しかざしが後くハ馴て何共なかりしなり其後また初て獸を撃し時其苦まむを見其聲  
 と聞て惻隱の心なからんや甚た心よ快よからず殺生ハ是まりとまで思ひしが是も馴て  
 ハ何共思ハせ後よハ却て狐や狸ハ心よ足らぬ熊猪を打されハ殺生せしとハ思ハざり  
 し兎かく凡夫ハ物に馴安く危きものなり是をおもへハ盜賊などよ成ものも惻隱差惡の



心あれハ初ハ心ハ恥もしたり心ハ快よき事もあらじ馴れハ無やうに成後ハ小盗な  
 どハ心に足らず終ハ切せり強盗にもなると見へたり我等も道をきかまじて前ノすが  
 たで居るならハいかバウリの悪人にもなりもやすらんと身震ひしての懺悔ハ誠に此  
 僧のいひしごとく凡夫ハものに馴安く危ふきものなり糸の色ハに染るを見て悲し  
 人も亦り人の性ハ善なれども教無して可ならんや十和が珠も琢磨の後夜光となる生知  
 安行の聖人さへ十有五而學に志七十而心の欲するところに従へども矩を不踰と曰  
 ずや汝僅の材智ハ誇り自ら是として教を不待して足りといふ是を儒家にハ自暴といふ  
 て除ものよし佛家にハ是を我見といふて付合ぬ且つ汝我が力人に越身に藝術あるに誇  
 れのれハ如者なしと思へり是所謂井の内連中汝が自慢の藝術に柳生關口の印可を添汝  
 が自負の勇力ハ亦百人の力を増ども翁が目ハ井の端の小兒危ふしハ腹立て曰く  
 我に百人のちからを加ハバ藝術ハたのますとも誰にか天窓をあかすすべき何ものよか  
 勝さるべけん翁笑ふて曰く力山を抜術風に御事を得たりともおのれよりつ事不能して  
 ハ危ふしハ其おのれに克事は學問の力ハあらざして何ぞ汝がふとき己にかつ力無し

て強きを頼み藝に得こる輩ハ不死といはれども饒伴よして死たる中間なり扱また術  
 千人よもすぐれ力人に越たるものハ世界に強ものなしと思へん是則井の内連中何は  
 ど術よ達ても何程力が強ふても齡といふ強ものに出合ては手足の力も弱り腰もろいと  
 齒も抜目も耳も疎なる此とき其術いづれの所にかある力いつれの所にうある扱また一  
 統こわいものあり汝土を潜り水上を歩行飛行の術有といふ共一度つぐとに出合なバ其  
 術共に取てゆるん此ときに至り日比の我ハ何處よあるぞ常ハ此所を忘れざれ  
 永き日ハながき油斷に暮の鐘翁夢覺茫然として曰くむかし莊周夢に胡蝶となる栩栩然  
 として胡蝶なり莊子夢に胡蝶とあるか胡蝶の夢莊子とどなる歟莊子も夢胡蝶も夢翁も  
 また夢ある歟夢の内に夢なる事を知らざして夢に遊ぶ覺て初て夢なる事と知る如斯い  
 ふも又夢なる歟夢の内なれば夢なる事をしらすして夢に遊歟覺て又夢なる事を初て知  
 らんか過にし事を夢と云ハけふも又明日の夢今も後の夢ならん夢も夢覺るも夢死も夢  
 生も夢横絶も夢堅白も夢



夢〜と口にはいえど悟やらで  
夢にもめ見てあそぶ夢助

虚白齋

賣卜先生糠俵後編 終

小哲學賣卜先生糠俵前編跋

至れる哉賣卜先生の言近ふして最卑俗の風諭  
に長せり是所謂其善旨遠さものか翁卜を驚ハ  
其行いや〜けれども人を以て言を廢ざれば先  
哲のいましめ釋氏も依法不法人とかや説けり  
とれ其人を知らずと云へどもつら〜思ふに  
卜翁の學精一の杵臼を経るものにあらずばい  
かで此糠を掃集る事を得ん世の人此俵をひら  
きて小袋に入持去て朝夕身心の垢を洗ひきよ  
めりしとたのまぬ世話をさし出の神の御託宣  
守るべ〜

堵庵



小哲學賣卜先生糠俵後編跋

此草紙の畢竟は人を善にす、むるにあり是非  
の論は我是を知らず今や翁の糠俵をふた、び  
振ふは初の鹿ならんをおもひ後の密なるを以  
て倍人心の垢をさらむとせ世間沙汰簸颺の類  
よ異なり所謂兩端を叩て盡すと云ものならし  
予が又尻馬にのりてかなはぬ筆を馳るは偏に  
例の多訣を盡と云ふものよやあらむ  
福の守の御託耳

善事よ心をつくし行えよ

よろづにあしきたはけつくまな

堵庵

全 明治二十年三月一日 翻刻出版御届

年全月 刻成

定價金六十錢

編輯人 故人 虛 白 齋

出版人 金鱗堂 伊東武左衛門

東京府士族 芝區櫻田本郷町二番地

出版人 眞盛堂 吉野喜之助

東京府平民 同區琴平町二番地

發兌人 陸前仙臺 金鱗堂支店

相州横須賀 同區琴平町二番地

東京通四 同區琴平町二番地

南鍋町 同區琴平町二番地

橋石町 同區琴平町二番地

本島町 同區琴平町二番地

三島町 同區琴平町二番地

黒舟町 同區琴平町二番地

大賣場 同區琴平町二番地







金鱗堂藏版書目

爲朝再興記 洋綴一冊 正價四十五錢  
繪本通俗戰國策 全 正價金三十錢  
日蓮上人御利生記 甲州歟澤仇討 全 正價金十錢  
哲學 賣卜先生糠俵 全 正價金十三錢  
忠孝 義烈 佳人廻仇討 近刻  
春色連理廻梅 中本五冊 正價金五十錢  
漢語 開化用文證 中本一冊 正價金十八錢  
開化三用便 全 正價金十五錢  
作文二千題林 中本二冊 正價金廿八錢

記事論說文例 中本二冊 正價金廿五錢  
女用文章 中本一冊 正價金十二錢  
新選數學一千題 中本三冊 正價四十五錢  
代數獨學 洋綴一冊 正價金十五錢  
普和算捷徑 中本一冊 正價金十二錢  
明治算新書 中本二冊 正價金二十錢  
ウエブスター氏 スペルリング 獨案内 正價金十錢  
ナシヨナル 第一リードル 獨案内 正價金十二錢  
洋綴中本一冊

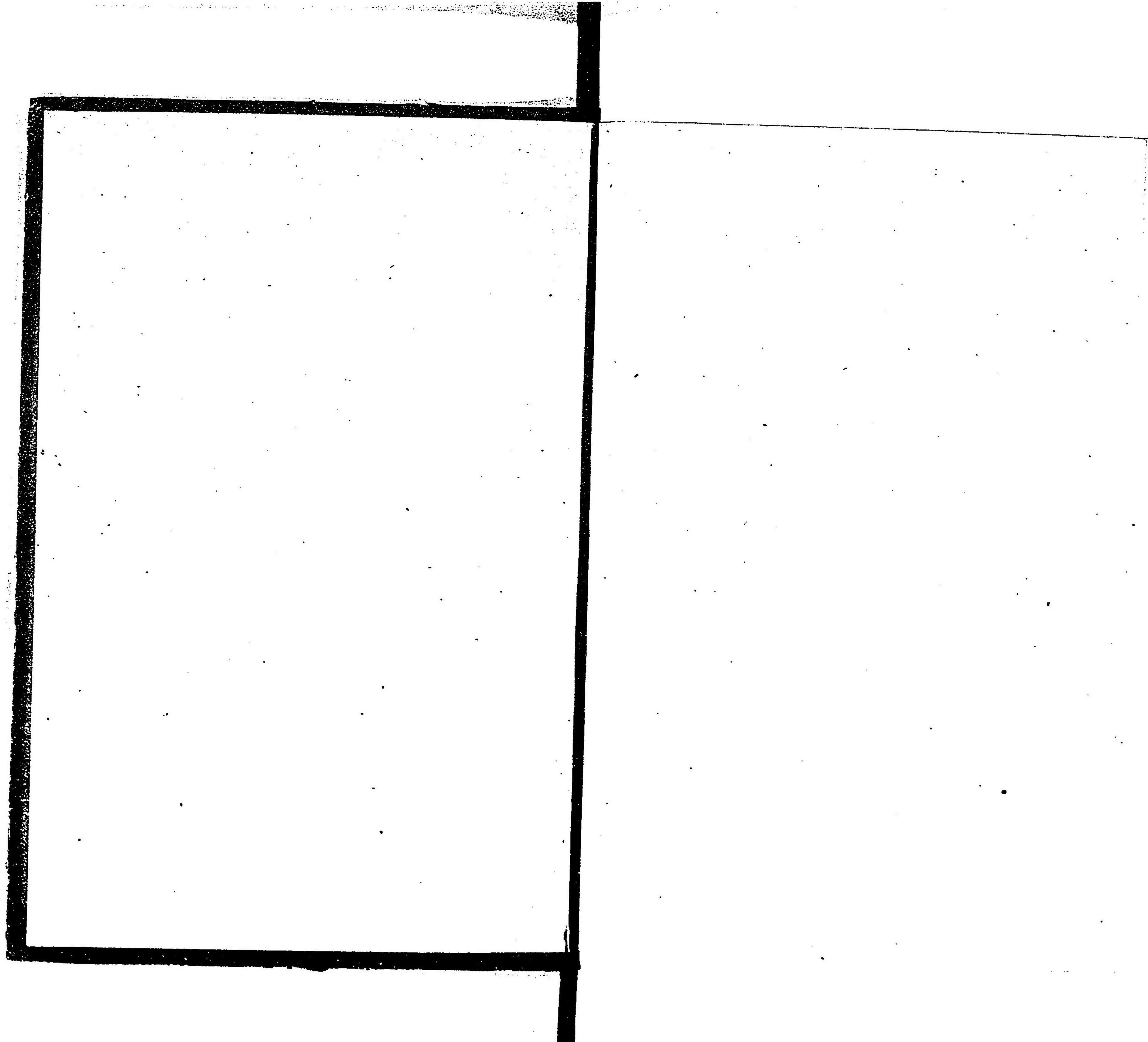
ナシヨナル 第二リードル 獨案内 近刻  
ナシヨナル 第三リードル 直譯 近刻  
英學 單語七ツいろは 洋綴中本一冊 正價金六錢  
改正大日本全圖 正價金十二錢  
明改正東京全圖 正價金十三錢  
改正成田山全圖 正價金四錢  
內國旅行必携 寸珍 正價金十錢  
改正 增補 驛路便覽 折本一冊 正價金廿錢  
新選 東京字林玉篇 全一冊 正價金廿八錢  
開化いろは字引 全一冊 正價金十錢

四書 片カナ付 寸珍方四冊 正價金廿五錢  
法華經要品 小湊山日長訓點 折本一冊 正價金卅五錢  
自我偈 兩點附 折本一冊 正價金四錢  
觀音經 兩點附 折本一冊 正價金五錢  
二十八宿一覽表 一枚摺 正價金四錢  
法華宗門珠數之功德 一枚摺 正價金四錢  
古文孝經 半紙本一冊 正價金八錢  
小學女禮式 半紙本一冊 正價金八錢  
諸家小傳 近世詩文 中本三冊 正價金廿錢  
古今狂詩選 寸珍二冊 正價金十錢  
膾炙絕唱 寸珍一冊 正價金五錢

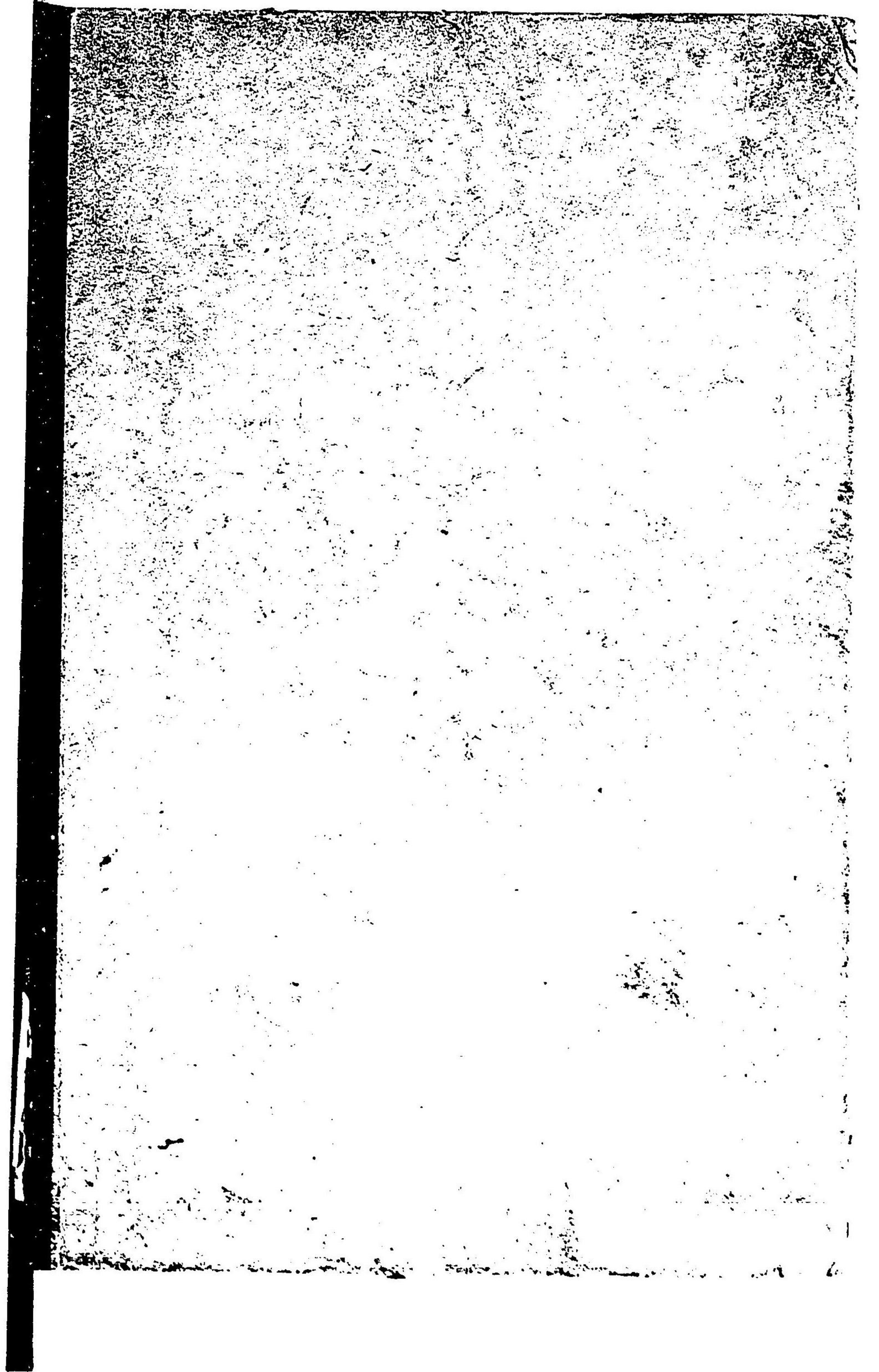


宋詩別裁集 中本四冊	正價金五十錢	小倉百人一首 中本一冊	正價金十五錢
東坡文抄 大本二冊	正價金卅五錢	<sup>三元</sup> 九星方位便覽 全一折	正價金七錢
絕句類選評本 寸珍五冊	正價金五十錢	義士銘々傳 寸珍一冊	正價金八錢
和漢洋年代記大成折本一冊	正價金廿錢	繪本二十四孝 寸珍一冊	正價金七錢
新版端唄集 中本一冊	正價金六錢	清佛戰爭記 寸珍一冊	正價金七錢
新版端唄都々逸 中本一冊	正價金六錢	義經蝦夷軍記 中本一冊	正價金十五錢
新版藝者都々逸 中本一冊	正價金六錢	濱廻幾佐古 中本一冊	正價金十五錢
新版端唄大全 中本一冊	正價金六錢	將基大全 寸珍一冊	正價金五錢
永代大雜書三世相 中本一冊	正價金十五錢	新選地口燈籠 寸珍一冊	正價金五錢
人相早學 中本二冊	正價金廿錢	新選造化懷妊論 寸珍一冊	正價金十錢
月花百人一首 半紙本一冊	正價金廿錢	<sup>改正</sup> 番匠往來 中本一冊	正價金五錢











091238-000-3

特11-487

売卜先生糠俵

虚白斎/著

M20

DBN-2092

